

昭和四十年十一月二十五日 印刷
昭和四十年十二月一日発行 (毎月一日発行)

川柳塔



川柳雑誌改題才三号

十二月号



清酒
日本盛

灘
西宮酒造 釀

ニホンサカリ

超特撰 (化粧ケース入)
「バリットル詰」・一、二〇〇円



えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎

国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4



誇る
海岸美を
風光明媚な

・今月のことば・

○わが国では嬰兒が生まれて百二十日目に箸ぞめとか、くいぞめといって飯を食べるまねごとをしながら、神棚や祖先の霊にその旨を報告して礼拝する内祝の習慣がある。

○この原稿をかく十一月五日の今日は路郎先生が逝かれて丁度百二十日目に当る。

○「川柳塔」が肥立ちよく育ってゆく姿を見守っていて下さる路郎先生のお顔がほのぼのと陰に浮んで来るのである。

○お顔の中で一番印象的で懐かしいのは、特長のあるあの「おひげ」である。

○アチラ化したのを身だしなみと心得る戦後

の迎合子の一部に対するレジスタンスとまではゆかずとも、最後まで先生は先生のシンボルとして自信があられたようである。

○私はいつも無精髭で押して来たが先生はキチンと整えておられた。

○「川柳塔」が十二月号を出すあわただしさの中に先生のお顔が、先生の「おひげ」が一入懐しくてたまらぬ。

生々流転 宿命論者の無精髭

生々庵



中島生々庵

川柳塔 十二月号

川柳塔 十二月号 目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことば

中島生々庵 (1)

ボーナスを出す人・貰う人

(28)

— 同人特集

若本多久志・吉田圭井堂・越智一水・
関戸宗太郎・本多清人・西田柳宏子

川柳塔

(同人作品)

中島生々庵選
北川春巢選 (4)
若本多久志選

英訳川柳の火は消えず

阿部佐保蘭 (20)

夕日と拳銃 (大陸放談)

東野大八 (18)

明治川柳と風俗 (八)

奥津啓一朗 (25)

川柳初篇研究 (三十一)

(26)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・高須嘔三味・丸十府・岡田甫

川柳太平記

(十一)

富士野鞍馬 (36)

秀句鑑賞 (前月号から)

後藤梅志 (16)

予 約

川柳塔と川柳の使命

川柳漫 釈

堺市民川柳大会から

「落城の火とも見ゆ」に泣かされて

雅号ぶつちやけばなし

近作柳樽選後感

近作柳樽

大萬川柳「初対面」入選発表

金泥集

作句教室

★柳界展望

★本社十一月句会

★各地柳壇

一路集

「夜警」
「ウインド」
「云いわけ」

戸田古方 (22)

唐崎専翁 (45)

小畑自由朗 (43)

八木摩天郎 (47)

不二田一三夫 (35)

正本水客 (44)

森本法泉子 (45)

室井八九寸 (50)

菊沢小松園 (42)

菊沢小松園選

川村好郎選 (38)

清水白柳選 (58)

麻生葭乃選 (47)

清水白柳 (48)

(童風)

(庸俗)

(文秋)

直原七面山選 (54)

田村藤波選 (54)

長谷川三司選 (55)

白柳・一三夫 (64)



中島生々庵選
北川春巢選
若本多久志選

錦司記念公演に出演して

高槻市 若柳潮花

小道具を提げて袖まで付添われ

振袖の紅が身につく髪かたち

肩はすに落し 女の呼吸する

つれ舞いの扇がはじく舞台の灯

袖屏風恋の濡れ場となる瞳

楽屋風呂呂男に戻る湯をあびる

帰郷して

稲わたる風は太鼓の音をのせ

寝ころんだ日もあるどての曼珠沙華

柿の実は赤し障子に影を置く

出雲市 尼緑之助

ズケズケと注文もあり披露宴

たまに出て寄るとこばかり子沢山

穴道湖の喜悅秋の陽が一ぱい

黒いものばかりニュースが追つかける

デモ解散ドヤドヤドヤとバーに入る

岸和田市 内藤きさ子

台風が来るぞ野良犬どこへゆく

裁かれる額の汗を見つめられ

ひたいひろく美しく清貧に甘んじる

カーテンが一つ即席易者なり

一尾だけ釣れてたのしい小半日

大阪市 正本水客

おしやべりに疲れて旅を寝静まり

不きげんな靴だと自分でも思う

石段をひとり上つて海が見え

中元も歳暮もこないいい暮し
虹を見ている子の眼に虹がある

岡山県 浜田久米雄

大阪の秋が大食堂に満ち

一升瓶しずくを垂らすだけ垂らせ
まつすぐに歩いていてもよく曲り

こちらから老化現象かと尋ね

風邪ひいているのを年のせいにされ

青森市 工藤甲吉

台風は来る百姓はうずくまる

台風はリングの気持ちなど知らず

天衣無縫秋風の中を行く

泣く泣くもヒモのとおりになつてい

シヨートヘアきようはしたたる日本髪

大阪市 本多柳志

免状をみんな集めてまだ嫁かず

小唄まで習うたのに社がつぶれ

赤い羽根一つが街のバスポート

出前持遅れた嘘も提げて来る

先生を偲んで

巨木倒れ空の青さの広さかな

大阪市 金井文秋

部長には遠く定年には近し

からつぽで泣いてる冬の冷蔵庫
不景氣に口をあわせて儲けとり

几帳面会計ばかり持たせられ

続かない日記をメモにしていまい

高槻市 傍島静馬

深呼吸どこかで肥をやつている

貫禄がやりくりしてると思わせず

晴天の霹靂敬老会から招待状

悠々と地下街すかたん歩いてた

裸からやる氣へ誰もついて来ず

大阪市 福井野迷路

何か一つ忘れたような日曜日

あつさりとあきらめこつそり次の手を

人物寸評

太陽に向つて干したその涙(賀川豊彦)

むつつりと結んだ出歯ヘューモア(近衛文麿)

息のひきとり方までも偉らかつた(東郷平八郎)

大阪府 西 いわを

雑草があるのも古い庭らしく

答えないことが答えとなつており

出る処を見付けて子猫鳴き止んだ

いつまでも金に追われて若う見え

祝川柳塔発刊

衣鉢つぐ各々が居て頼もしく

菅屋市 丸川 初甫

我俤へ大工の顔が變つて来

台風一過サボテンひと居る

竹垣の影へてんてん萩こぼる

飛び石の一つに立つて影と撮り

モードには遠く尼僧の衣透け

大阪市 水谷 竹莊

明治生れ万国博まで生き抜く氣

舞台劇コマギレにしてコマーション

その氣持わかると友も酔うてくれ

挨拶がすむまで芸者かしこまり

だまされてやる貰祿を旦那持ち

奈良県 西辻 竹青

冷厳な公私の別を子にさとし

倒産の社長は下座にかしこまり

捨て鉢になつても相手おどろかず

お茶くみも慣れていますと新社長

電話に何とかしてと金のこと

京都市 松川 杜的

如来像フラツシユが欲しい位置に坐し

秋だなあ比えいの色がもう変り

水でさえ張力と云う意地を持つ

精薄の眼にも秋空すき透り

嵯峨野にて

脚据えて竹藪道に人を待つ

布施市 久米 奈良子

月明り未来の夢を信じさせ

明日デイトバックの肌をたしかめる

何ゆえに買うて苦勞のひとつとなる

手を合わすそのすき間なるもの想い

衿ついてあれが祇園の妓やそうな

大阪市 市場 没食子

寝ころべは孫が馬乗りして起し

齒科眼科妻も疲れを見せ始め

仕事着で歩けば犬が吠えさらし

葬式の仕上げの酒で酔い梯子

孫久義

乳臭い孫を見あきもせず囲み

大阪市 山川 阿茶

タクシーに乗らぬ覺悟も汗に敗け

お若いと云われてほんとの年を云い

集金人のようなバッグも流行りなら

金を貯め頭のからつぽ氣にしてず

孝行と云う字を知らぬ六年生

大阪市 室谷惣治

難儀して看板降せば台風がそれ
台風水害の後

水ひいて主離れた靴一つ

本物がイミテーションにしか見えず

立ち読みをしても怒らぬ家で買ひ

大輪の朝顔咲かせもう定年

加賀市 野村味平

啄木の歌も土産へ盆になり

ぼろ屑のように生きてて悔もなし

キヤツシユでは売れず今日もあぶれて来

赤ちやんがあつてホステス身を崩し

鳥取市 河村日満

うれしゆうて狂女が聞かすハーモニカ

Mさんの表彰を祝いて

底抜けの騒ぎもうれし内祝

三徳山にて

散策へこの地の人の礼を受け

留守中に三人も逝く秋の風

岡山市 服部十九平

肝腎の要件二伸としてたのみ

猿は夢みるかみないか論じあい

独身のようにくらしですと笑い

強いられた親切飲むにオブラート

岡山県 直原七面山

師は逝きぬ七夕の夜に天駆けて

立入ったことにもふれて婦人科医

女哀し今日もせつせと米を磨ぐ

スラム街を吹きぬけて来た春の風

堺市 富岡淡舟

散歩道野菊台風も知らぬげに

長男に彼女ができたか便り来ず

菊植えて我が家を楽しいものにする

おやこんなところに秋の花が咲き

大阪府 西出一栄

虫喰いの柿を蹴りつつ行く散歩

快復を待つ間に孫が大きなり

心より体の方が先きに老け

ご持参の車で花嫁里帰る

奈良県 草深酔升

金借りに来たのヘビール酌いでやり

油断して豆台風になめられる

張合のなさは囁託と言うつよめ

秋の蚊は必死に寄つて吸わず逃げ

新居浜市 小林孝正

栄転をして友情にひびが入り

ビジネスで来た焼香の長い列

スリッパも寄り添う温泉宿内湯

ネクタイを毎日かえて出世せず

京都市 室井八九寸

台風に耐えてこおろぎ声かぎり

万国博までは死なない死なせない

忍ばせた数珠素戻りのご長命

数え二十才を寮母とする古稀米寿

大阪市 橘 高 薫 風

プラタナス散るインテリの恋しずか

男一人女二人のハイキング

断崖絶壁断崖絶壁冬の恋

雲間から陽の矢恩師は胸に生く

篠山市 遠山可住

伊勢音頭妻もジュースで一つやり

肥えたのが笑いはじめた秋の風

よく似合う言うてほしいで見せに来る

おじさんと思うてますと恐がらず

竹原市 杉原愛鳩

テレビかと思えば壁の虫の声

人間が猿のまねしている踊り

残業をしてタクシーで娘が帰り

にぎやかにローカルバスは嫁のこと

笠岡市 木山遠二

広すぎる家に残され老夫婦

つれづれを繻くものに絵入辞書

かくしやくと敬老会へ来ててれる

値上げしたその日の豆腐売れ残り

岸和田市 植山武助

カタログを集めて夢がまだ続き

派手過ぎる衣裳も役者の名で着られ

米野菜の値段も知つていい夫

胃病に悩んで

手術した人を尋ねて気を直し

豊中市 寺田花宵

スピッツもいつしよにひいた秋の風邪

先に裏見てしまうのも癖と言ひ

気の長い恋にコーヒが二つ冷え

開通日乗るためだけに乗りに行き

米子市 石坂新雪

水虫をかきむしる血で気を晴らし

日本語を探すにこまる国になり

白兔海岸にて

老眼にはつきり見える海の色

課長の死を悔み

一ツだけ俺より若い死を悔み

大阪市 米虫一乃字

台風を神経質な芒の穂

梅田から一緒に乗った秋の蠅

カーテンを吊れば明るい台所

金持つていても抜目のない言葉

岡山県 横山一声

家庭電化一年おくれでついて行き

乗る車もない特急ばかりふえ

折詰が出てからこそそこそ人がへり

値上げした弁解 外の値を並べ

新居浜市 近藤凡生

墓碑なき妻へ春の彼岸を約束し

登山した子が気にかかる夕鴉

倅せは妻亡き後は祖母慕い

芸一途生きた余生の世にうとく

ハワイ 羽佐間柳葉

麻生路郎師の他界を悼む

柳界に仰ぎし巨星地に墜ちぬ

抜き衿の癖が昔を匂わせる

観光団裏は見せない事にする

プラン組み待つ間楽しいピケーション

大阪市 不二田 一三夫

野菜の高値に怒りダイヤの値に夢を持ち

横断に舞いの手かざすおつ師匠はん

清潔さに恋し欲求不満にもだえ

こんな達筆で便所に落書きし

倉敷市 田垣方大

朝花火祭の村になりにけり

雲一つない日にベルトコンベヤー

どうしたのなんでもないわなにかあり

大阪府 早川清生

亀生まれ甲羅の重さまだ知らず

妻も入院

妻在らず悲しきテレビ悲しすぎ

入院の妻があやつる糸のまま

豊中市 戸田古方

定期券会釈をすれば会釈する

遺作の如く普代の顔ならぶ

小さな見栄一番うしろからおりる

大阪市 石倉旅風

位置かえて佇つてみて見よ庭の石

蒸溜水所詮は生きる水で無し

紅葉してくれた二階の植木鉢

岡山県 本田恵二朗

ふるさとはうれしメダカに迎えられ

良心にやめろやめろと囁かれ

雨雲に月をあずけて酌み交す

東京都 石居高志

受話器もう居留守になれた語調で来

満月へロマンも何も無い夜道

どう見ても柳眉と云えぬ眉を立て

倉吉市 奥谷弘朗

物心ついた養女にくたびれる

マージャンの嫌い同志で馬が合い

借りて来た智慧と見やぶる女房にて

大阪府 谷沢好祐

乳牛の末路のように整理され

スモースにゆけば世話役褒められず

コンクリートの割れ目で雑草花をつけ

熊本県 有働芳仙

エレキギター明日は知らない腰をふり

不況風泳ぎの下手が首になり

馬鹿な子だと云えば遺伝と云い返し

竹原市 山内静水

名声を成しとげ少うし残る悔

出しやばりのおばさんあれで字が読めず

よけるだけよけて埃をあびせられ

堺市 吉田圭井堂

効能を読めば医者など要らぬ筈

まともではあんな外車を買えるかい
公団に住んでおんなじ型となり

大阪市 中川滋雀

靴篋の代りになつてた鯨サシ

自分だけ不幸と決めて妻の愚痴

お隣りの犬だけ尻ポを振つて呉れ

大阪市 平沢保美

まだ意地を張れる生活に感謝する

税金迄払うてる私道で轢かれかけ

家の女房でも十五分かかる化粧

小松市 関戸宗太郎

税務署の次にお寺がせびりにき

つらかつた頃の写真も笑つてる

一日がこんなに永い六度五分

今治市 越智一水

貧農が保守を支持するとはあわれ

母の文鉛筆なめたとこわかり

変骨の蝶が秋まで生きのびる

大阪市 大坂形水

ウエディングケーキヘカメラ一斉に

出番待ちやたらにお茶が欲しくなり

ボーナスを渡す訓示にちよつと照れ

大阪市 西田 柳宏子

絶対になおる宗旨が又見舞い

或る時は孤独が欲しいサラリーマン

西宮市 樋口 舟遊

飼犬が朝の散歩をさせてくれ

園児より親が疲れた運動会

岡山市 江国 幽谷

どの球もみな打てそうに解説者

胃を病んで三年前のウイスキー

定時帰宅孫の笑顔が待つており

島根県 藤井 明朗

日曜日妻の指図に甘んじる

赤い羽根関所のように立つている

おみくじは凶でも慕情たち切れず

大阪市 天正 みさ子

哺乳瓶夫にまかし観劇会

ただ何となく脈があるから生きている

愚痴言わず植木鉢にねぎそだて

奈良市 宮口 笛生

ブルトーザー山川草木押しつぶし

出雲屋の手に抵抗のないうなぎ

平手打ち見事にきまる秋の蠅

愛媛県 村上 旭童

お祭の雀のんびり稲をくい

四十は若し祭のみこしかく

戦争と平和互いに憎みあい

男絶つとき男のようになつていた

マツチ燃えつきてもとの闇となる

夫だけに働く六感持ち合わせ

出稼ぎが御輿かつぎに帰郷する

大人の真似して悪いかと喰い下がり

義理で買う友に義理で安く売り

鶏を追うて老農ふところ手

工衣のまま社宅の葬へ来ては去る

口紅の煙草半分ほどで消し

望楼に屋根のお守りをして貰い

山なみを屋根から見せて町延びる

干し物の柄も噂の種になり

口ぐせのほどに多忙さ苦にしてず

遮断機が事故のなかつた音で開き

叱かられる積りが梨をむいてくれ

岡山県 池田 古心

愛知県 原 峻一郎

出雲市 中川 晃男

枚方市 宮川 珠笑

高砂市 吉原 紅月

姿鯨人間むごいものを喰い

小さな倅せ子と球根を植える

兵庫県 河原みのる

公用の封筒見得も手つだつて

丹波秋色 一句

松茸は見せてもらつただけのこと

農村氣質 一句

ライトパンに替えたら向うは高級車

大阪市 河井庸佑

井の中の蛙と知つたあわてよう

雑草のように言われて強く生き

逆境のむこうに幸せ待つており

平田市 久家代仕男

借金に押し潰されて近代化

稔らない稲に自嘲の鎌を入れ

せめてものレジスタンスが出荷拒否

岡山県 田村藤波

大根一本昔の頭では買えず

プロになるまでの苦行を見てくれず

石蒲団着て人間の値が決まり

守口市 村田瓢太

定年近しもう部下さえもよそよし

満員車隣にサロンパス貼つた人

二十年敷かれ放なして平和なり

京都府 西村句楽坊

賀状書く名が又へつて老さむし

今年も終りだなーと仏の眼

あせらずに夢来年も和尚きめ

出雲市 原 独仙

愛妻を失つた壮氏へ(二句)

わびしさを支えるものに庶民の詩

旅馴れている気易さが乗り遅れ

駐在さんも飲酒運転村はずれ

芦屋市 唐崎 専翁

法王とテレビに出ると電話くれ

挺入れの力も抜けて株値下げ

言あげぬ庶民にあがる最後の手

大阪市 賀本 昇

席譲るところか逆に巾を取り

ちつぽけな判が大きな役目する

いささかの恩を忘れぬ年賀状

新居浜市 安藤 桂仙

名月へ病妻の床かえてやり

捨てて来た筈の故郷の事を聞き

老夫婦声かけ合つて朝を起き

大阪市 宮尾 あいき

故市郎氏へ

年下の句友の追悼句よむも人生

天婦羅にされたうらみかいか跳ね

ブラジャーでいじめたオツパイ出てくれず

兵庫県 大江 秋月

角ビンを空けて夜汽車を寝るとする

托鉢へ子が走り出る一握り

遮断機があがり一人だけ通り

大阪府 児島 与呂 志

まだ十五円でしたかなどとつりを取り

ガンで母を亡くした人にとけ込めず

善意善意と身の廻り気付かずに

布施市 渋谷 三 時

念押しで最後の頼み聞いてやり

マダムへの便りホステス知りたがり

借り衣して出た日に憎くし俄雨

下関市 原 千 里

ハンカチに未練包んでしのび泣き

十円が戻るはがゆい赤電話

行水を誰れはばからずおばあさん

山口県 長 野 井 蛙

小遣儲けにしてはいささか汚れすぎ

イデオロギー話してわかる場が持てず

呉市 林 野 甦 光

氷山の一角チンピラ検挙され

独走の態勢 米寿の寂として

門真市 福 島 鉄 児

口癖の通りに酒で死にはつた

葬式の話題酒量のことにつれ

加賀市 那 谷 光 郎

多忙多忙ここ妾宅は丹前着

その訛りなつかし湯女に郷の客

富田林市 岩 田 美 代

憎みつ従ひつ女のどうかしら

眉毛など富士子の形に剃つて見る

神戸市 仲 どん たく

家で妻社では税吏に調べられ

ワンダフル云うているのに富士は拗ね

玉野市 小 谷 仙 山

口笛の一きわ呟えて居て孤独

見るだけでいいと押売荷をひろげ

堺市 高 崎 雄 声

台風のそれが不眠一年生

何ぼ引つばつてもかくれぬ膝小僧

大坂市 今西章雅

見合して今度は娘乗気なり
癌早期診断治ると保証せず

大坂市 酒田清子

快復へ拍車をかける孫が出来
胃袋へ申訳ない消化剤

高槻市 山田季賛

溜息をすれば女房は笑うだけ
鉢植の菊で我が家も秋になり

富田林市 浅川八郎

師の爪跡へ唯よたよたとよたよたと
盆栽を不自然とせず育くまれ

伊丹市 小川静観堂

夏バテをとりかえすように秋を喰い
手鏡にうつる神と悪魔のうらおもて

和泉市 西岡洛醉

腕組んで目をつむり座席ゆずらぬ気
唇の薄いの井戸端会議長

笠岡市 出原真奇

てなもんやないかとばあちゃん口ずさみ
横綱がスローモーションで又転び

岡山県 蔵本白梅子

天寿などと他人あつさり言つてのけ
楽しさも恐さも金で思い知り

松江市 柳楽鶴丸

台風の教訓生した青写真
たるんだ肌へ上手に着こなす五十才

美禰市 安平次弘道

忍従になれ能面のような顔
憎悪ぶつけて家裁を我がペースにす

小松市 馬場魚山

台風は苦もなく秋を置いてゆき
生馬の眼を抜くような土産物

大坂市 福井多蘭子

毛染葉の名を教え合う寺詣り
公園でひとり味う子沢山

——自選——

中島生々庵

支離滅裂私の無智のじれつたさ
のしかかる小さな嘘がうずきだし
スケジユウルまことしやかに旅に出る
甘えてはならぬ背骨をつんと立て
幸福の倦怠拝む心に程遠し

松江梅里

孤独感秋のいたずらとや云わん
傷心を想い出のある湯に癒し

おうわさをしてましたのよと酌いでくれ

かけ持ちのお座敷顔だけ出せと言う

二次会は奢つてもろたと思ひ込み

清水白柳

長男結婚式を挙げる

言葉なき感激二組の老夫婦

親はただ涙おさえて式終る

見送りは親友だけのハネムーン

山並みも目にはいらない旅なれよ

家柄を言わず他国に縁があり

川村好郎

たまに出る夫婦へ山も霽れてくれ

見物より隣へ土産さがす妻

ロマンスシート誰に会おうと妻と旅

母親が喋りまくっている見合い

妻が出来子が出来村をもう去らず

北川春果

パチンコの玉までままだにしたいボス

握手して職業知れる掌の柔さ

まだ嫁ことせず保母さんを相つとめ
聞き合わせに来ぬ縁談のたよりなさ

戴帽式

キヤツプみな誰にも似合う清潔さ

西尾 葉

色の道メンデルの法則ここに活き

おつうじのあつたことも話題の老夫婦

悲喜交々悲喜交々を積み重ね

後手後手と廻る生活の五十年

うだうだいうて山盛り見比べる

若本多久志

あげ底の箱はお義理でくれた菓子

秋日和なのに競馬でいらいらし

ひまと金自由になる頃皺がふえ

こけし皆眠むそんな目をして並び

逢うて来て帰れば元の顔になり

菊沢小松園

大阪に居ます住所は書いてなし

明治大正昭和と生きて手内職

性は善何んでも引受けさせられる

子沢山夜中に物干す用が出来

老人の愚痴と笑つて帰されず

秀句鑑賞

— 前月号から —

後藤梅志

日常あり勝ちな出来事を取り上げたにしては
機知をかんじられて、素直ないい句と評する
ほかはない。

百姓へ 夕日 ストンと山に落ち

(紀世美)

この句も同一人の作であるが、「ストンと
山に落ち」が斬新に感じられる。

夕陽が落ちるのは、空気が澄みわたっている
ほどはいい。ストンという表現は、音を伴
うもののようにかんがえ勝ちだが、必ずしも
そうとは限らない。「すっぱり」という意
味にも通じることがあると、知ってはいい。

表現の自由さをとる。好作家である。

生活上やつと四球を得たほどの

(一三夫)

野球で四球をえるのは、自分の力ではない
相手投手の出来、不出来だが、敬遠される場
合もあって余り有難くない。しかし塁へ出た
ことは確かだ。これを得点に結びつけるには

まず足であり、闘志であろう。機を見るに敏
でもなければならぬ。へたをすると残るい
にもなりかねない。こうした微妙な立場を、
わが身を感じる緊迫したものがあるならば、
油断出来まい。

生活は向上したが、ちよばちよばである。
やっと思いがさした程度だが、頑張らねばな
らない。うっかりするなよと、自分にいい聞
かせている注意深かさが、この句には出てい

近頃、川柳にたいする考えかたが変ってき
た。むつかしい理屈をいっても、新しい作家
にはそれが消化しきれないのである。それよ
り「庶民の声」といつたもの、何の種仕掛け
もない卒直な、心のひらめき、を表現した句
に魅力を感じる。これは一つの進歩であるか
また退歩であるかははっきりしないが、現在
の川柳界の、一つの動向であることはたしか
だ。私はこれでよいのではないかと考えてい
る。誰れもが謙虚になって、育ってゆくもの
を育てる。そこに、大きな希望の光りがさす
ように思う。しかしらん作ではこまることは
申すまでもない。

みな天を突いて 麦の穂たくましや

(甲吉)

米と麦は、どちらも穀物の王様であるが、
一方は、稔るほどかしらの垂れる稲穂である
にひきかえ、麦の穂は、みないい合せたよう
にするどいきっ先を、空に向けている。造化

の妙を感じるまえに、はりつめた、どこかに
吹き流しても立っているかのような五月の空
を思わせ力づよい。
この句は、ひろびろとした人間生活の楽し
さを感じさせ、如何にも頼母しい。
句には、その人を含んじさせる姿勢という
ものがあり、また「構まえ」がある。この句
の構えは、最後の「や」にあるように思う。
すなわち「たくましや」であって欲しい。

自分でもおかしい位 素直な日

(紀世美)

この句には、少女の姿が想像される。学校
の出来のいい娘ほど、生活力が旺盛でピチピ
チしているが、したいことはキチンキチンす
るかわり、なかなか親のいいつけには、内心
反抗もあつて必ずしも従順ではない。妹をこ
っそりいじめたりする。

それが或る日、不思議に素直になっっている
自分が、違った人のように思われた。という

る。真面目な句だ。作句の手腕もなかなか確かである。

紀の川になるせせらぎで手を洗ひ

(柳志)

なにかすがすがしい句ではある。「大台高原探勝」と傍註があり、紀行中の句にしては良いものを見つけた。

大台ヶ原は、日本国中一位の、降雨量の多い場所で、紀伊、大和、伊勢の国境にあり、この高山の周囲は夥だしい水系にとり巻かれている。

その一つの紀の川は、吉野川の下流であるが、沿岸は住友はじめ大きな産業施設を誇っている。実に関西の宝庫であるが、その水源の元はといえば、この山山のせせらぎに外ならない。二十年ほど前に、私も行ったことがあるが、何かしら靈氣をかんじさせる山である。何か大きなものに支配された、そしてかばそい人間の存在を知らされた一行が、各々の心をもって、その汚れた手を、杖と、あるせせらぎですすいだであらう。この句が探勝句のなかで光っている。

さからえば母の白髪が目立つなり

(奈良子)

母親にとって娘は、いくつになっても子供の時の面影を宿していて、いとしい。そればかりでなく、くせも、欠点も、知り尽している母親だけに、口やかましいのが常識である

若い者には、ききづらい愚痴もこぼす。永年甘えてきた母親であっても辛抱しきれなくなる。ときには反抗してみるのが、当然のように思えるが、この句のように、永年苦業を共にした母親の、白髪が、目にうつるようになっては、もうさからえなくなる。本当に心から大切にしていれば、母さんは涙をポロポロこぼしてやるこぶだろう。

おしつこを聞きとれなんだママが訛ひ

(珠笑)

台所で用事をしていると、別室に寝かしておいた子供の泣き声がする。用事を済ませて行つて見ると、しっほりおむつが濡れていて大変なおしつこだ。抱き上げておかわるいわい、母ちゃんがわるかったワネとママが訛びる。よくある母性愛を詠んだ、好感のもてる句である。

スタミナを考えている市場籠

(久米雄)

おとこには、うんと働いてもらわなければならぬ。それに當養だ晩のおかずもたまにはピフテキにしようか。などと、とつおいつ市場籠を提げた奥さんが、店先きで、思案している。こうした風景が目につぶが、サラリとした味で、老巧さが目につく。

釈迦老いてようやく女犯から逃がれ

(清生)

ネパール国の王子に生れた、釈迦は、二九歳にして人生の無常を感じ、出家してさまざまな難業苦業の末、三五歳で悟りを開き、八〇歳でこの世を去った。大覚者仏陀となつても、永い間女犯から逃れることができなかったことは、この句の通りであらう。仏教では女を犯すことがなくとも、心に姦淫を催すことがあれば、女犯となるきびしい戒律がある。このことを想像すれば、女というものは誠に厄介な存在であると、云わなければならない。

お買物は
4都を結ぶ
大丸へ！



大阪・東京
大丸
京都・神戸

六三三四学制に似た家を借り

(白 柳)

六畳、三畳三畳、隅切りの四畳半でもあらうか。昔ならちゃんな借家だが、こんな家を借りて、さて妙な家に住んだものだ。と感じたという、面白い句だ。流石に無駄がない

小役人 望を捨てた顔に見え

(弘 朗)

戦後、役人の数のふえたのにはおどろくが

〔・大陸放浪・〕

夕日と拳銃

東 野 大 八

檀一雄の小説に「夕日と拳銃」というのがある。ことしだったかテレビドラマでもやったことがある。

新京でこの檀と放埒無さんなあけくれを送っていた私は、よく真昼間から柳町へとしけ込んで、妓相手に昼酒をあふった。二人とも紺ガスリの着流しで、ともに二十代である。こんなとき

「オレのこどもの時からの夢は、アムンゼ

公務員と名前が変わっても、実質は旧態依然たる小役人で、法規にはしづまれ、上がつかえ、魂のやり場もない。こっちから見れば、三分の一ぐらいいへしてもよかりそうなものだが、そうもゆかぬらしい。有能な人には気の毒な話だ。顔まで小さくなったかと思われる。こんな人達がわれわれの周囲にはたんといる。生活の保償は得ても、さりとては気の毒千万。小役人の顔を浮彫りにして、捨て難い句だ。

ンと馬賊だった。文学はこいつをやってからあとの話だな」と九州弁で檀はいう。

檀はいったった捕鯨船に乗せてもらい、北極のオーロラをみてきたから、アムンゼンの夢は一応達せられたわけである。しかし、馬賊の方は注文通りに運ばなかったの、せめて小説で——という寸法にちがいない。

「夕日と拳銃」の主人公は伊達鱒之助とい

うのだが、これは実在した伊達鱒之助がモデルだ。この男は岩手の伊達藩主伊達宗政の三男坊というが、実はメカケの子である。メカケも一人や二人ではないので、兄弟（イヤ、腹仲間かな）が何人いるのか彼には見当がつかない。そのためぐれて、ウサ晴しにピストルばかりぶっ放していた。おかげで大変な名手となり、人の頭にリングをのせてそれをうつというとんだウイリアムテルを気負ったものだ。檀の出生もこの伊達鱒とそっくりで、彼の妾腹による仲間は一体何人いるのか今もってわからずにいる。彼の放縱不羈の性格はこういうところからもきていて、その本性は「火宅」という作品にくわしい。

それはとにかく、伊達鱒は、緑林出身の張宗昌と肝胆相てらし義兄弟となり、その名を張宗援ともいった。張宗昌は張作霖の参謀長で、満洲で鳴らした男だ。

伊達鱒は興安嶺山麓にまず本拠を構え、一の子分の松本要之助に拳銃を教えるので満洲まわった。日本軍が後についているので満洲義軍とも称したが、馬賊にかわりはない。

大体が日本軍の御用馬賊がホントの「馬賊」であって、反満抗日の馬賊は「匪賊」で扱われた。馬賊の方には日本人のやくざ、ちんぴらが仁俠の誓いも固く馳せ集っていた。当時日本には

「僕もいくから君もいけ

せまい日本にや住みあいた
シナには四億の民がまつ

という馬賊のうたがはあった。
これは私の大好きなうたで、今もバイ一で
きげんだとこれもうなりました。

さて、伊達順と張宗援のライバルには大
刀会、紅槍会という自警団上りの匪団がい
た。この連中は、黄色い布切れで頭を包み、
神サマの護符を飲んで出陣する。戦いで勇し
く働いて死んだらすぐ神サマに生れかわると
いうのが宗旨だから強いこと、勇敢なことと
いったら話にならないほどだ。

日本軍は、こういう連中とも戦ったわけだ
が、ヤッコさんらは裸のチャン馬（中国馬）
に乗り、真正面から雲のように群って襲来す
る。日本軍はその正面に重機、軽機を一系列
隊にならべ、まるで実弾射撃でもする気で迎
えうつ。引きつけるだけ引きつけ、ムダなく
掃滅という次第だが、敵さんはそんなことは
一向頓着なしだ。手槍の首につけた紅毛（こ
れは女の月経で染めたものでいわば厄除けの
マジナイ）をひるがえし、半裸の形相凄まじ
く裸馬蹴たてて殺倒してくる。

西部劇映画のインデアン製の来とウリ二つ
と思えば結構である。馬足速く風の如く駆け
てくるので、時にはこちらは引きつけすぎて
泡を食い、機銃のつつ込みをやるやら、銃口
を上へハネ上げるやらで、アツというまに川

中島の信玄の二の舞となり全滅した部隊もい
た。大和魂もそうなると身は紅毛（シャレで
はない）の軽きに蹴ちらされるというわけだ
伊達順は、のちに陸軍中將の軍服をつけ大
威張りしていたが、日本敗戦と同時に青島で
捕えられ銃殺された。そのトドメの一発は拳
銃であった。中国人にもシャレたことをやる
人間もいたとみえる。

彼の一分松本要之助は蒙疆で匪賊に墜
ちたが、彼は女が大好きで一日一人を犯さね
ばキモチが悪かった。ために兵馬こう走の間
には忙しいので馬上でコトを行ったというか
とをやっていたのではロクなことはない。の
ちにライバルの匪団の手におち、素裸にされ
空井戸に逆つりの極刑をうけて死んだ。

とにかく伊達順にしても助平要サにしても
結局幸せな男というほかはない、好きなこと
をやるだけやって、太く短くこの世にケリを
つけ盛大に死んだのだから。

「国を出るときや玉の肌
いまじゃ槍傷、刀きず

これがまことの男じゃと
ほほえむ顔に針のヒゲ

馬賊のうたはまたこんな文句を勇しくつけ
加えているが悍馬の背にモーゼルの抜き身を
輝かせ、彼等もまたこのうたを朔北に、興安
嶺の風に乘せたことであろう。そのとき彼等

のシルエットを黒々と描きつくすのは、壮大
雄渾なあの満洲の夕陽である。その夕陽は満
天輝くばかりの朱色にそめ、ぎらぎらと金粉
を真紅のその光ぼうのほむらに舞わせながら
海原の如き地平線を悠揚とおりていった。

大陸の地の果てに君臨するこのけんらんた
る落日は、男たるものすべてが生きていること
の何んたるかをそこに見出したことである。わ
れら大陸浪人のすべては、その雄渾なる光ば
うにその身を染め、そしてその若人の血潮を
たぎらせつつ生きていたのである。

ともあれ伊達順や植はその拳銃と夕日に孤
独で、そして人の世につねにムカムカしてい
たむらっ気をたたきつけて滅ぶことを悔い
なかつたのである。夕日と拳銃、可愛想な奴！

すばらしい
。着心地
蝶 矢
シャツ

英訳川柳の 灯は消えず

阿 部 佐 保 蘭

我が川柳翻訳研究会も一昨年堀先生を去年はRHブライス先生を今年は麻生路郎先生をうしない悲嘆に暮れている折柄、小生の句集を出した際知りあった長崎の高校教諭の佐前晃嗣君が、柳人でありエスペランチストで然も熱心な川柳英訳者であることを知って、川柳英訳の灯は消えずといささか意を強くした次第である。君は得意のエス訳川柳で一応ヨーロッパの知友のエスペランチストに川柳紹介の労をとって居られ、その英訳川柳がハンガリー語訳川柳7句となつて帰つて来ている。去年の10月から今年にかけて訳された英訳川柳の中から、発表して戴いてもよいと書き送られた10句並びに、小生のすすめを入れて英訳され拙訳を謝して居られる路郎、霞乃両先生の句を発表させて戴き英訳に理解深かりし今は亡き路郎先生の靈に供えると同時に大方の忌憚なき御批判を小生よりもお願いする次第である。

切手趣味小学生を友に持ち (昭二)

Oh, Philatelist!

A school kid treat you

As his dear friend. By Shōji

お小遣い貰う時だけパパが好き (晃嗣)

Only when I give him pocket money,

My child says,

“Oh, my papa, I love you.” By Kōshi

猿之助の肩を揉んだが自慢なり (晃嗣)

“I say, I ever massaged Ennosuke,”

Said the massagist proudly. By Kōshi

Note: Ennosuke is a famous Japanese

Kabuki actor.

この人も孤独都会の青空を見ている (光一)

He also feels solitary.

He gazes at the blue sky

Over the metropolis. By Kōichi

少しずつ開けて遅刻の顔が出る (黙六)

The door is being opened very slowly,

Then appears the face of the late comer.

一橋の艇庫教える老いの顔 (佐保蘭)

Showing the Ikkyō boathouse

Into him came the nostalgic sentiment.

Oh, that old Ikkyō man, By Saboran

Note: The Ikkyō University is famous for the picked crew.

The writer of this senryū is a Ikkyō man.

来し方を考えている花吹雪 (佐保蘭)

A rain of eherry blossoms.

Oh, my days gone by!

Where art thou now? By Saboran

ほこりよく払い古本屋値引きせず (宗三郎)

Dusting the book,

He never reduces the price.

The master of the second-hand book-shop.

探偵の方が人相悪いなり

Look!

The detective is worse-looking

Than the culprit.

水族館で見ると横目も使う鯛 (ひさお)

At the aquarium, I found the sea bream could leer.

俺に似よ俺に似るなと子进行 (路郎)

"Yea, resemble me,.....

Nay, don't resemble me in nature,"

I think of my child, By Jirō

飲んで欲し止めても欲しい酒を酌ぎ (葎乃)

"Yea, please drink,.....

Nay, please give up drinking,"

But she offers wine, By Yoshino

古くとも僕には仁義礼智信 (路郎)

Though it may sound old fashioned

The code of my life is

"Benevolence, justice, politeness, wisdom, and fidelity.

By Jirō

夕暮は犬と一緒に歩くのさ (路郎)

Toward evening,

I take a walk with my puppy.

It's my modest joy! By Jiro

約 予

・戸田古方・

となられた須崎豆秋さんの句であり、あとの句は俳人山頭火さんの句であります。

豆秋さんは川柳界の一茶といわれた人、一茶は俳人であります。が、川柳にも通ずる数多くの名句を残していることはご承知の通りであります。一茶の句のよさが、一茶の生涯が不如意であったことと無縁ではありません。豆秋さんの一生も何ったところによると不遇に終始したということです。

山頭火さんの名は前からきいていましたが、その句に接したのは最近の朝日新聞日曜版「心のページ」でした。家庭的に恵まれず、世間的にも相当の苦勞をされ、禪門に入り、西行の如く、芭蕉の如く飄々と流浪托鉢に過ごしていられたとのことです。

引用した両句はその代表作といわれるほどのものではありませんが、どちらも何か俗界を抜け切った悟りに近いものを感じずにはいられません。

路郎・水府両先生なきあとと柳界の大御所川上三太郎さんは「川柳塔」第一号二一頁、中島生々庵さ

んの引用文のなかで「現在の私として気になることは、川柳を一番劣等視し、軽蔑しているのは川柳家自身である。間違つてならぬことは川柳家になることでなく、川柳家であることである。」

といつていられますが、「川柳家になる」ということは他人には川柳家らしく見せかけ、自分は川柳家であるとうぬぼれることではありません。自分が川柳家であるかどうかもわからない。ただ知っているのは、大地にしっかりと足をつけて、黙々と句道一筋を歩くだけである。それが「川柳家である」ということなのでしょう。

一茶はもとより、豆秋さんと山頭火さんの句を見ても、そんなてらい心は少しもなく、それにもかかわらず「いのちある句」であることを読むものに感じさせます。

作句の「句」は苦しむの「苦」です。人生の苦しみにぶつかったとき、人は一番真剣になります。

少しでもいい具合になるように苦心して、その方向へもって行くこととします。その真面目な努力、それが句の上にもひびいてくるので

はないかと思ひます。

作句の「句」は苦しむの「苦」ですが、その苦しみが「いのちある句」を生むのではないのでしょうか。

予 約 人 生

山頭火さんの句に

よい宿で

どちらも山で前は酒屋で

というのがあります。山頭火さんは軒毎に食を乞うて、今夜は幸せ

苦は句なり

作句の「句」は苦しみの「苦」と発音は同じ「ク」であります。川柳を作ることは楽しみでしようか、苦しんでしようか。今日はそのことを少し考えてみたいと思います。

阿呆なことというてしもうて淋しけれ

まったく雲がない笠をぬぐ

前の句は私達の先輩、今は故人

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話四三三四番

にもよい宿にめぐり合いました。ほんとによこんでいます。

この頃、予約とか予定とかい

ことに強く関心をもちます。台風
の九月だからかもしれません。

台風といえば昭和九年の第一室
戸台風の日に丁度満月の夜でした
ので月見の約束をしていたのが流
れてしまいました。

雨でずぶぬれの修学旅行をした
こともありました。今年も七月二
十一日から三泊四日の臨海学舎へ
百名ほどつれて行って二十四日に
かえるまで、一度も陽の目を見
ず、はげしい雨にたたかれてきま
した。

ぶっつけ本番で気持ちよく、気
楽な旅が出来るなんて今ではのぞ
めそうにもありません。何でも予
約、予約で、三月・半年も前か
ら、もっと一年も前からたのんで
おいて、ちょうどです。天気がど
うなるやら、何がどうなるかわか
らないのに。お互、あしたのいの
ちがわからん人間が、ためらいも
せず予約しているのです。

人間の予約ははじめから狂うこ
とを覚悟していなければ、とんだ
喰い違いを見ることにもなりかね
ません。

しかし、それでも予定をたて、

予約でものをしなければならな
いのが此頃のわれわれのくらしで
す。

私はこれを「狂う予約」と申し
たいのです。

狂わない予約

「狂う予約」がある以上、必ず
「狂わない予約」がなければなり
ますまい。予約人生の外に、予約
なしの人生、予約以上の人生がな
ければなりませんまい。

「狂うことを覚悟して」と申し
ましたが、それは楽しいものだと思
いこんでかかるから、楽しくな
ってこなければ、ああいやだ、苦
しいとなってくるのではないでし
ょうか。人生には、いろいろの風
がいつでも吹いているものなので
す。

数学でマイナスとマイナスが出
合うとプラスになるということが
あります。否定したものを否定す
ると肯定になります。

最初のマイナスは苦しみです。
次のマイナスは苦しみに無益な抵
抗をしないということ。こう
ならねばならない。自分に都合の

よいようにならねばならない、と
はじめから決めてかかる心は苦し
みをより苦しくします。仏教でい
う「悟」、「心を空にする」とい
うのもこのことでしょう。

空は空気の「空」ですが、カラ
ッポのことではありません。いわ
ゆる「ムナシク」で、とらわれな
いということ。風の中の羽根
のように、糖に釘をさす様に、の
れんに腕押しするように、相手次
第で如何ようにも変化しうる心で
す。無理をしないで、自然のまま
に漂々といけたらどんなにいいで
しょう。

この世は変化の連続です。天気
がどう変わるか、メンバーの都合が
どうなるか、変ってもちっとも不
思議ではありません。その変化に
はいろいろのからみつきがあって
複雑をきわめるでしょう。だか
ら、何の障害もなく、それこそ予
定通りにいったら、それはむしろ
珍らしいとよろこばねばなりませ
ん。

挨拶のことばに「相変らず」と
申します。誰もあまり気にかけず
に使っていますが、このことはよ

く味わなければならぬと思っ
たのです。

そこまでわかれば、ほんとうの
幸せとは何かがほお察しがつく
と思います。

苦しみを楽しみにかえるみち、
それは、苦しみのみならず自分
にあると知ることです。むこうを
変えるのではなく。こっこの心のも



ココロ
便箋



詠

おとこを聞いておき度いいお客
マネキンが着たようきれいには着れず
花形は教室と逆 運動会
飲めないが並々うける祝い酒

週刊誌離婚の活字使いすぎ
つきつきに呼びずて出来る友は逝き
色気ないものの一つに白髪染
旅は道づれ身許は知らぬままでよし

富士五湖をめぐりて

松山市 月原宵明

意地わるの雲富士山はまだ撮れず
箱根関所跡にて

箱根関所跡にて

昔話聞かしてほしい杉木立

箱根芦ノ湖にて

遊覧船笑顔満載ご出航

雑

しみじみと虫を聞きいる左前
苦勞する子沢山に似て燕の巣
三十秒間停車に乗車譲りあい
清元に長唄二号さん忙し
祭礼の幟が高い稲の出来

ち方をかえることなのです。

苦しみのなかからいのちある句
が生れるということは既に申しま
したが、その真剣な人生から、ほ
んとうに真剣ないのちをかけた句
が生まれるのです。句が生まれる
だけでなく、苦を苦の姿のまま
洗い清めて、それをご縁として、
自らの心で苦を薬とうけとれてい
るのです。

キリスト教では

「悲しみあるものは幸せなり。

悲しめるものには天国が近い
からである。」

といっているのをきいたことがあ
ります。

阿片のように、麻酔剤のような
歪んだ一瞬の享楽や、人生の幸せ
を得ようとする努力をごまかし
てしまったり、醒めれば空しく消え

てしまっているようなものではあ
りません。

この道を自分のものにする、そ
れが川柳の道であります。

若本多久志さんは川柳塔第一号
一八頁で、「故麻生路郎先生の遺
児『川柳塔』」といわれ、同誌、

巻頭の「今月のことば」で生々庵
さんは「川柳塔は実はまだ哺育室
で静かに生活を送っている未熟児

である」といわれています。

路郎先生という壁がとりはらわ
れて、きびしい世間の風にまとも
にわれわれはさらされはじめまし
た。これから「川柳塔」はいろい
ろの苦しみにめぐりあうことでし
ょう。「しっかりとやれよと激励の
花束」を下さった先輩のみなさん
はそれぞれ結構なご忠言を下さ
いました。先生の屍を乗り越えて、
先生以上になれと期待して下さっ
ています。

これは、一朝一夕にできること
ではありませんが、お互に考えね
ばならないことがいっぱいありま
す。苦しみを重ねる度毎に未熟児
で、しかも遺児ながら成長するこ
とでしよう。その時こそ、われわ
れはほんとの「川柳人」であるの
です。いのちある句がきつと残る
でしょう。

私は川柳道の精進こそ「狂わな
い幸せの予約」を自分自身にする
ことができると信じています。

そして、川柳塔が建立され、お
互はほんとに人間としても成功し
ていることでしよう。――本社句会
の柳話から――

女優

周知の如く慶長の頃、出雲の巫女阿国が、男装・帯刀の異様な姿で、踊った女歌舞伎が、若衆歌舞伎・野郎歌舞伎を経て、江戸時代に興隆しそのまま明治に引継がれた。

然るに明治にはいると、女だてに勇敢にもあらゆる男役に扮し

明治川柳と風俗 (8)

奥津啓一朗

て舞台上に活躍した岩井象八（市川九女八）一派がある。明治六年、両国の小屋掛芝居にいで、それから追々と市中の小劇場に乗出し、四谷の桐座、森元の開盛座、佐竹の浄瑠璃座などを廻っていたが、本所緑町に寿座が出来てからは、そこを本拠に十七年七月、二度目の旗挙げをした。

表情に細工の見へる新女優 秀耳
男装の女優乳房を持て余し 静 繁
女優の勝頼餅程にねばり 秋 香
艶やかさ鼻に女優がぶら下り 秀 耳
舞台上に立てば小さい女優 電 象
金縁に指輪に女優囚はれて 萬 雄
貞奴マダム縮緬製となり 葵太郎
八重州町太る女優を持て余し 茶坊主
黄昏を女優の通る中州河岸 静 繁
その頃名古屋には篠崎力枝・西川京之・坂東力代等の一座があつて、二十三年に上京吾妻座に象八と競演することとなり女芝居の全盛時代を現出し、神田の三崎座の如きは女芝居専門の劇場となつた。

定運を女工に持つが三崎町 飴 坊
自転車で女優の飛ばす八重州町 甘々坊
綾羅紗のマントを女優伊達に着て 眉 愁
其女優ホテルで飯を食ふ気也 半風子
洋食の味を女優の非難して 妙 雅
自動車に女優聊か微酔ひて 三太郎
十八の春を女優の束ね髪 豊海
落籍のいつか女優に身を変へて 七ツ丸
置手紙遂に女優となりけり 柳 影 子
星移り裏の小町も女優なり 龜 醉
臘夜を女優何処へか馬車を駆り 五九郎
小梅から通ふ女優の瘦世帯 静 繁
さる程に女優生活難をしり 芳 乃
布哇から女優の姉を戒めて 萬 雄
それはさておき二十四年、千歳米坂（ちとせべい）と名乗つて伊井蓉峰と共に吾妻座で新派の旗挙げをした芳町の芸者米八が新しい女優の魁だといわれている。

褒貶の中を女優に應じけり 三太郎
女優志願聊舞の素養あり 芦 村
妹は女優志願で色目もし 如山
活発の娘女優が理想なり 喜堂
落第を機会に女優を志願して 長 坊
才媛の一層女優になる気なり 目 貫
良妻になれず女優の群に入り 景 翠
幽闇で女優募集の沙汰は止み 歌 六
帝国女優養成所は川上音次郎夫妻の創始で、明治四十一年九月十五日開所されたが、応募者五百人中採用されたのは、十五人という厳しいものであった。

養成所生た玩具に金を掛け 茶坊主
川上を先生と呼ぶ女優生 五 葉
九女八は旧套だわと女優生 萬 雄
青春の只管燃えて女優生 三太郎
訓戒も馬耳東風の女優生 三日坊
藤間出の才媛にして女優生 奎 介
女優生悔るに少し遅かりき 五 葉
映画女優は大正期にはいつてからの出現なので、ここではふれなかつた。

川傍柳 初篇研究

(三十一)

共述 幹事

前田喜代人 川端柳風

共述 整理

岡崎重義 高須啞三味

共述 指導

清博美丸 十府

共述 補導

藤井和雄 岡田甫

(23オ)
385 ふけば飛ぶものでハざつと笑ふ也

魚交
清〓不明。「ふけば飛ぶもの」とは、何を意味するのであろうか。一応駄洒解を書いて諸氏の御教示を待つ。

当時流行した見世物に「吹け吹け」というものがあつた。片輪者、因果娘、蛇女等と同様に相当いかがわしい見世物で「守貞漫稿」には

「八文計の銭をとり、女の裙を開きて〇〇を現し、竹筒を以て之を吹く時、女腰を左右に振る。衆人の中、之を吹いて笑わざる者には賞を出す」

とある。この「衆人の中これを吹いて笑わざる者」というのを、主題句に結びつけてみたいのだが、どうであらう。

高須〓「ざつと笑う」というのは「難に

笑う」ことで「簡単に笑う」意がある。それで柳雨翁は「前座の品玉(芥子之助)で先ず簡単に笑つておく」と解いているが、それでよいのではないか?

藤井〓清説も面白いが「ふけば飛ぶもの」の「飛ぶもの」が意味不明だ。それで私は「金箔・銀箔屋」と解したい。商売物が飛散するので、仕事の最中大笑いする事は厳禁とされている。即ち「用心して、ざつと軽く笑う」金箔屋の仕事場風景と見たいのだが。

川端〓諸説それぞれに面白いが、どうも納得し兼ねる。

前田〓ふけば飛ぶやうな婆アと仲人言ひ

(タル一四)

があるから、この「ふけば飛ぶもの」は「婆ア」と見せし。口数が多い、憎たれ婆アを、「ふけば飛ぶ」と嘲笑したものと思

う。

岡崎〓藤井説でよいのではないか。

丸〓「ふけば飛ぶもの」は、文字通りの物で、ここは紙花の小菊紙。「ざつと笑う」は高須・藤井説の通り「軽く笑う」で笑う人物は遣手婆、とすると、詳解には及ぶまい。

同じ祝儀でも、手形では実感がわかない。笑いもざつとになる筈。

岡田〓丸先生正解。

可笑しくはなけれど一分だけ笑ひ (拾七)

かからからとぞ笑ひける三会目 (タル二九)

一分の金があればど可笑しいか (玉柳)

などの句からしても、吉原の遣手婆が動かせぬところ。「吹けば飛ぶ」は、もちろん

紙花の暗示。この紙花というのは、現代の手形に相当するから

白紙証文婆アはにが笑い (玉柳)
のように、稀に不渡りになる恐れもある。やっぱり現ナマでないと、欲ばり婆の笑いも、カンラカラとは出ないのである。

386 茶飯が過て三重がくるしそふ

門柳

清「茶飯」については、すでに
267 玉だれの内へ茶飯を食つて入り

(16才)

318 茶飯たきながら押入片付る (19才)
と、二句出ているから、説明の必要はあるまい。「三重」(さんじゅう)については「流鶯令難書」に

「三重は一句の花なり、鶴の雲上に舞うが如く、澄み渡り自由なるを好しとし、喧きを嫌う云々」

とあり、声楽の場合、男の声を三つのオクターヴに分けて、最も高いのを三重、最も低いのを初重、中間のを二重という。

主題句は、素人義太夫を詠んだものだがいづれには、素人が集まって行なう歌舞音曲の類には、茶飯がつきものであった。

岡崎「三重」を「川柳大辞典」では

「浄瑠璃の節扱いの一種で、本三重、片三重、上り三重、下り三重、忍び三重、別れ三重、競い三重、憂い三重など数多く種類があり、義太夫節で「着きにけり」など五音を長く引くを送り三重などと

称える」

と説明している。で、主題句は、腹ごしらえの茶飯を食い過ぎたので、しばらく出すように長く引いて唄うのが、苦しうだ、というだけの句である。

丸「賛」

岡田「同。浄ル本には「……三重着きにけり」と、よく出てくる

387 げびた物式三文ある硯箱

車弓

清「この「硯箱」は遊女が持っているものであろう。遊女は、盛んに文を書いたから「硯箱」は必需品であつたろうし、またかなりいいものを持っていたであらう。

その硯箱を、遊客が見た場合、それはその品の良悪にかかわらず、たしかにげびた物に見えるわけである。「げびる」については、下品というような意味に解されるが主題句の場合は「頂けない」ぐらいに解釈しておけば、よいのではあるまいか。

藤井「私の機の引き出しを調べてみた所、こわれたライター二箇、万年筆のキャップ一箇、パチンコの玉三箇等あつた。これは「げびた物二三文」という所か。

この句、女郎の硯箱と限定しない方が、面白くはなからうか。「二三文」とは、三文の価値しかない品々という意味だろう。持物や居室の調度品の品名・数量等を統計的に調査する学問がある。それによってその人の性格・職業・体質等々の関係が知られるとか。しかし「げびたもの二三文あ

る」から、人間らしい親しみを感じるのではあるまいか。もちろん「げびたもの」ばかりでは、問題外だが……

川端「藤井説に賛。屑屋に出しても二束三文の価値しかないような、粗末な硯箱の意であらう。「げびたもの」から、正月ではないかと思う。前に出た(2ウ)

30 物申というはず硯水がなし(一甫)の情景ではないだらうか。

高須「諸説考えすぎで、「硯箱」という文化的な物の中に、案外「下品なもの」が入っていた——ということを一寸しゃれた言葉で言っただけのものではあるまいか？ 前田「高須説に賛。硯箱の蓋には、花や果物をのせたもので、

硯ぶた茶受けに食うはげびたもの

(タル六)

鼻紙をはしけに頼む硯ぶた

(タル五二)

等の句にある通り、硯箱の中に「げびた物」の入ることは多い。

丸「高須説の通り、硯箱の中に銭が二三文入っている、それが下品に感じられる、というのである。当時の教育程度から、硯箱はやはり「文化的」に見えたらうし、金銭(はした金)に対する感覚も、そうしたものであつたであらう。現今の事務室などで、ペン皿の中に一円のアルミ貨が二三枚ころがっているのと同趣である。

岡田「賛」

出す側から

西宮市 若本多久志

ひと昔前、労働運動ラジカルな頃の話だがある会社で、あわやストライキと思わせる処まで追込んだ年末一時金斗争が、やっと妥結していいよ支給される際会社側は、のし、水引の印刷された袋に「年末賞与金」と書いて渡そうとして処、組合側は「賞与金」では受取れないとむくれ出し、又数回の団体交渉で、結局白紙の封筒に入替えて渡されたのが暮の三十一日だったという笑い話を聞いたことがある。

成程、組合側は賃金の後払としての一時金を要求（二応筋の通った理論らしい）したのに対して、営業成績と本人達の勤怠度に応じ、あくまで賞与金として支給しようとする会社側の恩恵的な考え方に、カチンとくるものがあつたのであろう。

然し我々のように吹けば飛ぶような小企業の経営者は、ボーナスであれ、一時金であれ、出せない時はどうしても出せないのだし、無理をして組合の要求を通せば、屋台骨の方が先にふっ飛んでしまう。

そんな時の団体交渉は実に悲愴なもので。

来たなッど労組へ頼が硬ばり

団交にヒューマニズムが邪魔になり
スト権はこっちに欲しい小企業

結局は若干のアルファをつけての妥結となる次第だが、近頃は組合の執行部も心得たもので、会社の潰れない程度に加減して要求も出し、じわじわと攻撃の手をゆるめない家康戦法である。

もとより私は根がよけい出したい方のお人好だから、つい労組のペースに乗せられて、いとも和やかに話が進む有様である。

ただ、営業成績は黒字でも金融的には赤字の時、ほんとうに辛いのが小企業の宿命で。

遮断機へ金策に行く気のあせり

労組へ訴えてみる金づまり

と、こんな句も生れてくる程東奔西走のあげく、女房や子供の貯金まで一時借りして、約束の日にボーナスを払ってしまうと、張り切ってた気合も抜けて。

ボーナスを渡してしもた気のゆるみ

で何にもせずに二、三日寝かして欲しいとさえ思うことがある。

然し又、順風に帆をあげたような成績で、団体交渉も一発解決、他の企業より早目に猶々とボーナスが支給出来る時の気持は、又格別である。

講堂に全従業員を集めて、期間中の労をねぎらい、新しい年度へ一層の努力を要請して、グループ毎に、ズッシリとまとめたボーナス袋を渡してゆく得意さは何ものにも比

し難い喜びである。

処が嬉しさの余り

ボーナスを渡す訓示は胸を張り

と、知らずしらず、そり身になっている、思い上がった自分
分に気がつく人間としての寂しさを感じることもある。

そこで、この訓示たるや、長くてもいけず、短かくても
いけない。

ボーナスの訓示は耳を通り抜け

聴いている方は、そんな話よりも「今、貰うボーナスで女
房にはあれを買ってやろう、子供には何を」と胸算用して
いるのだから、馬の耳に念仏とでも言う外はない。要領よ
く切り上げて、サッサツと渡して了うのが上策である。

又経営者としてはボーナスの効果を知ること大きな仕
事である。所詮、人間が人間を評価し、考査してのプラス
マイナスであるから、全員洩れなく満足といかないことは
悲しいが、一応綱んでおく必要がある。

先ず翌朝出社すると馳け寄って来て挨拶するのは満足
組で、私の顔を見てもお義理のように朝の言葉をかけてく
るのは不平組である。

百万言顔色に出て面白し

最後に、ある社員から聞いたボーナス余談をお伝えして
本稿の責を果たさせて頂こう。

それは昔からの言葉に「これはしたり」というのがある
が、この反対の言葉に「これは来たり」というのがあって
この使い分けがボーナスに関係があるというのである。

昔商家の番頭や小僧さんが、盆や暮にボーナスを貰った
時、自分の胸算用より多くさん入っておれば「これは来た
り」と、ほくそ笑み、少なかった時には「これはした
り」と主人の目のないことをかこったということである
昨今のように不況ムードが長く続いては、どの会社のボ
ーナスも恐らく「これはしたり」「これはしたり」の続出
であらう。

いずれにしても好景氣待望は労使共々に一致した念願で
ある。

零細企業のボーナス

堺市 吉田圭井堂

不況のどん底に喘ぐ零細企業のボーナス程企業者の頭の
痛い問題は外にないでしょう。不況の為に製品の動きが悪
ければ仕入れの方も控え目になり、従って支払い手形も少
なくて済むから、後は経常費の節約と金利負担の軽減を計
ればよいのですが、ことボーナスとなれば「不況だから今
年は零だ」とは言えない処に苦労があるので、戦前のボ
ーナスは経営者のお慈悲で戴くものとして、その多寡は別で
従業員から別途収入として大変喜ばれ、ボーナスを出した
翌日には、家族の人が遠路わざわざお礼にやって来たもの
ですが、此の頃のボーナスは「かち取る」ものとされ「戴

くもの」でなくなっていますから問題は簡単ではありません。零細企業では矢張り信賞必罰を厳にして、企業者の眼が節穴でない所をボーナスに盛らねばならぬのは今も昔も変わりなく、この点大企業では、事前に労組と打合せて定率をきめ、勤務評定に係りなく年限に応じで一率に支給されますが、零細企業の方はそうはいきません。

矢張り日頃真面目な者と、そうでない者と、何回も私用で勝手休みを取る者と、そうでない者と、遅刻早退の度数も一応考慮に入れて、その額を個々に定めねばならぬ。それも前期並に出せる場合は問題でないが、企業の方は次第に細まり在庫が増え、収益が低下している現状では前期並のボーナスが到底出せないとなると、十二月初旬に毎年渡していたとすると少く共、三カ月位前にその出せない理由を従業員に予告してやらねば、従業員の方でも予定がある事だから困ろう。

特に勤務している従業員は、日々その不況を身を以て肌を感じているからよいようなものの、家に居る家族達是不況を新聞やラジオで見聞しているだけだから前以て云うて置かねば、ボーナスであれもこれもと買う夢を持っていては大変だから、この予告は経営者として寧ろ親切なやり方だとも云える。

ところが新聞やラジオでは不況産業の方には一切触れず好況産業の方のボーナス額を大々的に発表するのだからたまったものでない。

苦勞してボーナスを出しても、こんな記事を読むと、そ

の苦勞が水の泡で、却って従業員を動搖させたり怒らせたりする結果となりかねない。

ここに零細企業者のむずかしい所があります。昔は不景気になると諸物価が一斉に下向きになり、勿論収入の方も下りはしたものの何とかやって行けたものだが、現在の不況はどうです。公共料金は申すに及ばず、諸物価は以上りで報酬は釘付け、ボーナスは前期を下廻るとなれば、従業員の家庭も大変なショックに違いありません。

然し、企業者の方も景気の立直る見込みがつかぬ以上、いつまでもボーナスを普通に出しつ放す訳にもいきませんまた如何に政治の貧困を叫んでみたところで、そうした頼りない人に政治を託しているのだから仕方ありません。

ただ自分の手でこの難局を切り抜けて行くより外に道がないと思っています。

いつの時代でもボーナスを出す側より受ける側に廻った方が気楽でよいのではないかとつくづく思っています。

ボーナスの重さ無口にしてやらね

圭井堂

貰う側から

今治市 越智 一水

『風々上がれ、天まで上がれ……』幼ないころ、こんな風上げ唄をうたい、正月(旧正)のくるのを指折り数えて

まったものである。年越行事のために、年の暮、母はあわただしく借金を返しに行くのを子供心に覚えていた。

貧乏百姓をしていても正月だけは、子にあなたにかいものを食わせ、そして着せたいと云うのが親心であつたらしい。そのころの私は桐下駄を買ってくれることが一ばん嬉れしかった。紺の着物に桐下駄をはいて、風上げをしたことは童唄とともにわすれることは出来ない。その風上げをしたあぜ道も、野原も、いまは文化、文化におしつぶされてしまった。

戦争に敗けて、生活の様式がすべて変わるとともに、村の様子も変わってしまった。だが今も昔も変わらぬものは、われわれ庶民の生活苦でなかりうか。せめて正月くらいは、両親と妻子に、あなたかい新春を迎えさせたいと思うのが、昔変らぬ願いである。盆も正月も無休の労働で二十二年、ばらな塋田にかじりつき、妻には内職をさせて、それでいて赤字々々の十二月である。ボーナスは結局、借金の穴埋めにしかならない。

アンブルをのみのみ稼ぐ十二月

国敗れて、二十年の間に、独占資本は造船一位、鉄鋼二位をはじめ、工業生産性、生産量では、世界の五指に入る水準にのし上っている。にもかかわらずその反面、労働者の賃金は進んだ工業国の中では、けたはずれに一ばん低賃金である。少々のボーナスで労働者の目をごまかしても、へのつっぱりにもならないのが現実である。

山一証券には無利子、無担保で百億もの大金を工面する

政府が、われわれ労働者のささやかなボーナスには、おおじょうとしない。

合理化による労働強化で、若者の生活設計はおびやかされ、婦人は職場から締め出され、年配労働者は首切りにさらされようとしている。物価と公共料金はどんどんはね上げてゆく政府。

大臣へぶっけてやりたい家計簿

その上、平和を口にしながらかアメリカの侵略戦争に協力し、日韓条約を批准しようとしている。今年のボーナスは総評の日韓条約阻止斗争とからみあわせて、どのような時期に、どのようなかたちで妥結するものであろうか。もし要求が通り、家計簿の赤字が解消するならば、長い間、苦勞をかけ通しの母と、そして妻を、せめて近くの温泉なりとつれて行きたいと思っている。

ボーナスのピンとキリ

小松市 関戸宗太郎

ボーナスが近づくと、新聞記事に避けたくなる場所がある。それはピンからキリまであるボーナスの要求、決定額の記事である。せめて記事になる最低の線程と思うのは私一人ではないだろう。わずか一カ月分の給料程のボーナスでは半期の家計の赤字を埋めるのが精一ぱいで、特別変っ

たプランの立てようもなく、冬物の下着の補給程度が関の山です。不意の出費やささやかな利殖の資金は数年前先祖が残してくれた空地へ、時代のブームに乗って、貸車庫とアパート建てたので其の利潤の一部を当てている。何分文無のやること資金のほとんどは銀行のお世話になったので元利の返済の為本当の利益は二、三年先の事。だが会社組織の有難さこの方のボーナスは専務取締役の肩書きを持つ専従社員の妻との話し合いで赤旗と労働歌の抵抗もなく決定してしまうので何の苦勞もない。

然しながら本職のお勤の方はそうはいかない。こん度は頂く方の組合側である。会社は経営の赤字、黒字にかかわらず、増配ともなると国会議員皆様のお手盛りよろしく万場一致で可決されるものの、さてひと度対労組ともなるとそうはいかない。四年程前御用組合としては最高の抵抗であるスト宣言、地労委幹旋と踏みきり、時間切れぎりぎりの夜半世間並に近い給料の一カ月分を勝ち取り現在に至り其の後は一進一退現況維持が精いっぱい労働組合であります。ましてや今年のように不況風吹き巻く日本経済を見逃す会社側ではありません、夏のボーナスでは強硬に経営不振を叫び遂に一定線を大きく割ってしまった事は残念でたまりません。物価は不況ムードはなんのその遠慮なく上昇、おえら様はボーナスの不足分は不況ムードで勝ち取った差額を株券の増配と言う手で何んなくおぎない何の不足もなくいとのんのと御出勤あそばされている。其のむくいはい若い従業員に見離され。平均年齢三十五才従業員の

ほとんどはごま塩かカッパ頭おっさんばかり、会社の前途は真暗です。

身から出た錆とは云え、これでいいのだろうか、上は社長から下は風呂焚きのおっさんまで内職に一生懸命です。かく言う小生も其の内の人だから余り大きい事も言えない。然し一家七人生命の灯を保つにはこれも生きる道の一つではなからうか。少し作文がしめっぽくなったが少々オーバーな表現かも知れない。最後にいもや大豆が主食として配給された頃に冬のボーナスとして頂いた金で安物のズボン「オール化織」を買った時ボーナスの倍額ほど不足分を足した思い出があります。その頃の事を思えば一カ月分程のボーナスもまさに四等国から一等国になったような気もするのは情けないことですが、倒産よりもましと思っ居ります。

ボーナスでせめてテレビが買えるほど

ボーナスの記事へ老眼鏡を忘れ
二十年赤字赤字で増築し

家を建てた

大阪府 本多清人

朝夕の涼しさが過ぎ寒さが肌に感じられる頃となると、職場ではそろそろボーナスの話題が花を咲かす。

私の会社では阪神及び東京などの地に十余りの工場があ

り、それぞれボーナス期（六月・十二月）にはその業績によって、一〇点より九〇点の差がつく。

組合の連合会が交渉して妥協した金額に各工場の業績が加味されアップしたりダウンしたりするのである。が我々としてはその持場々々でベストを尽しており、その差は十分に景気に支配される。さらに同じ点数で各個人の成績に分配され、これは何分にも人が人を捌くのであるからどうしても片手落ちの感がある。そこで

片隅へ寄ってぶつぶつ不平組

ということになる。しかし当社の自慢の一つは社長の温情により、定年退職の諸先輩に対し二十年以上勤務したものは終身ボーナスが支給せられてのことだろう。ボーナスを受けに来た方たちとお会いして昔の苦労話や今の発展ぶりを語り合えるのもなかなか楽しいことなのである

ボーナスの夜は活気のある社宅

さて家庭に於けるボーナスであるが、永年社宅住いの私には向い三軒両隣りはおろか約六十世帯が同じ会社社に勤務する夫や父を持った社宅の風景が今でもはっきり見えるようである。

そんな中で私の信念でボーナスを極力倅約して自分の家を持つまではと欲しいものも我慢してついで来て呉れた妻や娘に対してはまことに感謝している現在です。お蔭でみな努力と会社の厚意により三十八年初夏に狭いながらも自家というものが持つことが出来て一先ず安心してゐる。

昨今のボーナスには

ボーナスに妻の予約と子の予約

と相成りうれしい悲鳴をあげている。併しながら何分にも貰う額のががしれているのでなかなか思ふようにはいかない。そこでああでもない、こうでもないとなぜかめごとが当分続くのであるが、家族は妻と長女次女の四人で男は私一人でどうしても不利になり、結局はやり込められる破目に相成りなかなかこちらのものは廻って来そうもない。

今度のボーナスも大蔵大臣たる妻に一切をゆだねてうまく処理して貰うよりほかに手はなさそうだ。

ボーナスをみんな渡して家庭無事

ボーナス雑感

大阪市 西田柳宏子

またボーナスの時期が来た。我々俸給生活者にとつては待ちに待っているものである。年に一回や二回と云わずに、四回でも五回でも欲しいものである。

事業経営者や、農業、自由業、その他に比べて、定収入があり気楽と云われるサラリーマンも、結局ピンからキリまであって月収何十万と云う重役級や、プロ選手から、月給一―二万程度の駆出しまで一様ではない。然もその大部分が、手取数万円程度の謂所労働者に属する「サラリーマ

ボーナスを出す人・貰う人

ン”である。

ボーナスに対する交渉や、貰えるまでの経過は省いて、いよいよボーナスの支給額等が決定した段階から先を眺めて見ると、川柳家は皆面白く、鋭くとらえていることに気がつく。

赤旗の要らぬボーナス社も儲け

宗義

ボーナスも決り映画に居る師走

日満

旗振った割にボーナス上らない

庸佑

悲喜交々の裏を秘めて決定したあとの感じが夫々に出てい
ると思う。

次には懐勘定：予算を繰る段になると

ボーナスが足るかと思う妻の夢

柳宏子

ボーナスに妻子は予算先に組み

文秋

まだ予定をたてたり、愉める間は倅としましょう。

定退へボーナス月の味気なさ

草右

ボーナスで手術する気のままで逝き

珠笑

に至っては何をか云わんやであろう。
やがて待望の支給日ともなれば

ボーナスを両手で受けるに軽すぎる

弘道

ボーナスで今更ながら知る格差

宗太郎

ボーナスが懐にある靴の音

祥月

その靴音をひびかせて街に出ると

ボーナスの重さを女手でまねき

六竜子

肩でドア開けてボーナス散らして来

慶之助

ボーナスの袋はウインド見て歩き

黒天子

然し乍ら後生大事に家にもって帰れば

押売りがボーナス貰った事も知り

十九平

ボーナスを貰えば欲が一つ増え

祥月

と云ったこともあり、

ボーナスにしわ寄せをする借が増え

文秋

を

ボーナス袋見せ借金を払って来

静水

になり

十二月手品のように金が消え

東岸

ボーナスが素通りをした注連飾

和三郎

斯くして夢も泡雪の如く消えて果敢ない金詰りの現実
に引戻されるのである。

どこまで行っても余り金に縁のない私ではあるが、最近

の不況、休職、倒産等の噂が巷間喧しい折柄、たとえ予算

には遙かに足りなくとも、ボーナスが貰えることは幸と云

うべきか。

世情騒然ボーナスもゆれにゆれ

柳宏子

あてにする程ボーナス来てくれず

柳宏子

★

いよいよボーナスシーズンである。

ボーナスをめぐって川柳人はこのように書いてく
れまし

た。
出す人と貰う人に同数で原稿を依頼したが結果は二対四

というになりました。

編集部

「落城の火とも見ゆ」

に泣かされて

不二田 一三夫

霞乃先生は、生駒のアート氏のお宅や、住吉区の一歩氏（元川柳雑誌社）宅で静養されているが、本誌創刊号へご執筆をねがった「生命の一頁」は各方面から激賞され、編集部としてもこんなにうれしいことはなかった。路郎先生ご逝去後、まだ日も浅かったのにあの名文章はすごかった。

前号の近詠をいただいた時、まず、

事務整理

書類焼く火は落城の火とも見ゆ
の玉句に胸を打たれ、ガラにもなく涙が出たものである。ぼくが川柳で涙をだしたのはあとにもさきにもこの玉句だけである。とくに八年二カ月の間、霞乃先生のおそばで編集

川柳塔社同人を募る

★同人費月額二百五十円（入会金不要）

★ご希望の方は本社同人部へお問合わせください。

川柳塔社同人部

をお手伝いしていただけて万感胸にせまるものがあつたのだ。

ぼくは霞乃先生には可愛っていただいた。

夏みかんやビワなどの果実をいただいてもぼくはついぞ手を出さなかった。

「くだものはおきらい？」

「きらいではないのですが。皮をむくのがじゃまくさいのです」

こんなぼくに、霞乃先生は、幼児にたべさ

すように、それからはいつも皮をむいてくだ

さつた。もったいないことである。夏みかん

など、フクロをさいて皿に盛ってくださつた

ものである。

ぼくの計算の弱いのは天下の周知

で（知っている人は）金を計算して

合つたことがないのだが、霞乃先生

は一度もイヤな顔をされなかった。

霞乃先生もあまりお強くないので二

人で句会の受けつけにいと、毎月

多いかすくないか、めつたに計算が合わない

ことになつていた。

たいていの女の人は、こと金銭になるとう

るさいのだが、霞乃先生ほど人をうたがわ

ない方はめずらしい。だからぼくのような者

でも十年近くもおそばにおいていただけたの

である。ぼくはムカツ腹をよく立てるタチだ

が、霞乃先生にだけは、いまだにそんな気持

ちになつたことがないのも、やはり心から尊

敬しているからなのであろう。

本号にはなにも書いていただけなかったが

新年号にはぜひごムリを申しあげるつもりで

いる。このページがあつたので、とりとめ

ないことを書いてしまった。

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも心に
くい贈物かと存じます

一〇〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば
日本橋
四
条

高島屋

川柳太平記

(十二)

富士野鞍馬

年号も八重に吉野の御座所 (五五10)

年号も吉野の方はさくらざめ (二二31)

と川柳に詠まれているように、天皇の兩立と共に、年号も南北で制定されたのである。

それから南朝の大内義弘と義満との対立となり、応永六年(一三九九)の応永の乱で、義弘が自殺して、一段落となった。そして義満は、応永十五年(一四〇八)五十一才で死んだ。

義満の長子義持が四代將軍になったが、その子義量に譲り、正長元年(一四二八)四十三才で死んだ。五代義量も、応永三十二年(一四二五)父より先に十九才で夭折した。そこで六代は、義満の二男義教が継いだ。義教はまた、嘉吉元年(一四四一)四十八才で、赤松満祐に殺され、その子の義勝が七代を継いだ。在位二年、嘉吉三年(一四四三)十才でなくなったのである。

足利義政

義政は義勝の弟で、嘉吉三年(一四四三)八歳で八代將軍になった。義満から後の將軍は、いずれも幼少のロボットであったので、前將軍が大御所で、權臣たちが政治を行ない、いさおい幼將軍の生母が政治に発言する

足利義満

義満は義詮の子で、正平二十二年(一三六七)十一才で、三代將軍になった。

永和四年(一三七八)義満は、京都室町に花の御所を造営し、ここで政務を執った。それで足利幕府を「室町幕府」というのである。そして京都と鎌倉に管領を置き、幕府を強化した。

応永四年(一三九七)には、京都衣笠山の麓に別邸を営み、金閣寺(鹿苑院)を建立したのである。それが今日なお京名所になっている。

案内の紙で足拭く金閣寺

(ケイニ)

拝見の門で足袋ぬぐ鹿苑寺

(橋中仙初)

金閣寺くりに草鞋が二三足

(傍二27)

人よく金閣寺から先にする

(管初19)

稲妻の大きく入る金閣寺

(武三39)

稲妻も敷居の高い金閣寺

(拾三)

月にぬれ旭にひかる金閣寺 (一〇四34)
この金閣三層樓の壁には金箔がつけられて、金色燦然としたものである。

元中九年(一三九二)義満は、南北和睦を取計らい、南朝の後龜山帝は、それをいれて京都に入られ、それからは南北送立を条件として、北朝の後小松天皇に正式に讓位された。ここで一応南北朝合一となったのであるが、十九年後に、北朝が和睦条件を実行せず、後小松帝の次に、皇子、称光帝を立てたので、後龜山帝は憤慨されて、京都を脱出して、また吉野に帰られた。これからまた後南朝がはじまったのである。

吉野山むだ花のさく四十年 (一五42)
年号も吉野の頃は八重に成り (一一四21)

ようになり、それで応仁の乱も起ったといえよう。

義政は二十一才で、十六才の日野富子と結婚した。ところが男の子が生れなかったの
で、僧になっていた弟の義視を還俗させて世
継ぎとした。その時「たとい男子が生まれて
もすぐ出家させて家督は変更しない」という
条件であったが、その翌年富子は義尚を生ん
だのである。

富子は義尚を世継とすべく、侍所の山名宗
全をたのみ、義視は管領細川勝元によって、
はげしく対立し、ついに応仁元年（一四六
七）戦争となった。この戦争は、文明五年
（一四七三）勝元、宗全が死ぬまで、十一
年間も続き、京都は焼野となってしまった。

応仁は山と川との軍なり

（三〇一七）

応仁の乱山と川いぢり合ひ

（二三四〇）

応仁の戦紙と煙草なり

（拾五）

山名、細川を「山と川」といい、武州の細
川紙と上野の山名煙草に洒落て川柳に作ら
れている。

応仁の乱の間、義政は細川方の陣中に軟禁
されていて、いくらかヤケ気味になってい
た。

文明十二年（一四八〇）には、東山四明ヶ
岳の麓に、北山の金閣と相對して銀閣をふく

む広大な別荘を建てた。これが慈照寺（銀閣
寺）で、京名所になっている。その東求堂に
は義政法体の像がある。庭は相阿弥の作で名
園といわれている。

銀閣寺ばかり見残す出養生

（武三二〇）

銀閣寺金閣寺より慾がなし

（武六三）

はめるにも銀閣寺にはよくなし

（二一ス六）

などと川柳に詠まれ、なお、

王様の側金銀のお寺なり

（四二三）

金銀の寺王様の近所なり

（三四一）

寺の名は金銀町は綾にしき

（六五二）

分銅と桐で名高き京の寺

（六七二）

金銀に吹替のない京の寺

（四三二）

京は寺江戸は金銀座となされ（一一七五）
と金閣寺と並べても詠まれている。「分銅」

は銀貨の刻印で「桐」は小判の刻印である。
そうして義政は、延徳二年（一四九〇）五

十六才で死んだ。その翌年義視は五十三才
で死に、義尚は延徳元年（一四八九）それよ
りまえに二十五才でなくなっている。

次の將軍は、義視の子義植が、義政の養子
となつて継いだのであるが、義視の兄政和の
子義澄に譲つた。その義澄（永正八年（一五
一一）三十二才で死）が、永正五年（一五〇
八）近江へ逃れたので、再び義植が重補さ

れ、大永三年（一五二三）に五十八才でなく
なつた。

足利末期

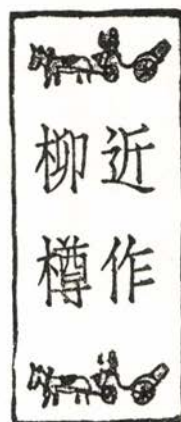
応仁の乱以後の足利幕府は、勢力衰え、政
治行なわれず、内紛続きで、諸方に新興勢力
が起り、所謂戦国時代となつた。その間にも
足利將軍は九代義尚、十代義植、十一代義澄
と継承されてはいるが、有名無実であつた。

十二代は義澄の子義晴が將軍となつたが、三
好氏が専横を極め、政令は行われず、財政窮
迫のうちに、地方勢力の圧力を感じながら、
天文十九年（一五五〇）四十才で死んだ。

その長男義輝が十三代をついだが、永祿八
年（一五六五）三十才で、松永久秀に殺され
た。それで従弟義栄が十四代となつたが、わ
ずか三年で、永祿十一年（一五六八）二十九
才（又は三十一）で死んだ。

そこで義輝の弟義昭は、織田信長の援助を
得て、名だけの將軍になつたが、その後信長
と不和になり、諸国を流浪して、慶長二年
（一五九七）六十一才で、大阪で死んだ。

ここにおいて、尊氏から十五代、二百五十
年で足利幕府は亡び、織田信長の時代となつ
たのである。



菊沢小松園選
川村好郎選

大阪府 今井 章子

秋の浜欠けた貝殻だけのこり

美しいかたちで木の葉枝を去り

触れるものみな焼き尽すごと花カンナ

防波堤海は怒りに濁つてた

郷愁を断てと埋立工事中

昔より女は燃える曼珠沙華

尼崎市 海士 天樹

通げきれぬ逆光線に佇つ埴輪

悔いのない負け堂々と拍手うけ

手形からにげたい旅の苦い酒

嘘つきに來たわけでない見舞の目

名古屋 市 吉田 水車

不肖の子やたら石碑へ水をかけ

観光と別に僻地の子のあわれ

何時の間に寝るのか金魚よく動き

新幹線早くも走り疲れたか

新居浜市 三木 利行

婚約をしてあいそよい娘に戻り

貰つてた招待券を破る恋

四つ玉にまだまだまけぬ五つ玉

想い出のあるとは知らぬ妻と来て

金沢市 根上 杏花

參觀日女教師一はけ塗つた顔

要領よくチャンス掴んだ廻り椅子

背の子の通りに横断手を挙げる

郊外に住んでよかつた虫の声

尼崎市 岡本 昭三

噴水のここには夏がまだのこり

被害地へ一足早い霜が降り

お隣の子にバイバイをして出かけ

秋祭統一神主さんをあわてさせ
兵庫 県 斎藤 たけお

雨漏りに鍋釜臨機の用に立て
冷蔵庫だけ光つてる台所

青森県 岩 淵 一 星

石の倅美人の指につままれる
注射器に入れば空気も邪魔がられ
オモチヤにも休日がある孫の留守

広島県 小 島 和 幸

釣れません携帯ラジオ聞きながら
思春期の学校が一番面白い
勉強をしてるつもり灯をともし

出雲市 影 山 青 三

咳止まず散薬こぼす膝の上
老の秋いたわり合つて山の寺
虫しぐれやんで踏切ベルが鳴り

松原市 守 屋 万 竿

あの窓と団地の客は振りかえり
靴はいた母を見附けた写真帖
写真帖はがしたあとを知りたがり

大阪市 稲 本 凡 子

儲からぬ仕事の電話かけ忘れ
誘惑をされたと親は信じきり
食べられぬ菓子を見舞が食べてくれ

出雲市 板 垣 草 丘

すぐハイと言えぬ所に居た素振り
台風で落ちた梨だと云わず売り

今日の日に追われぬ人の知恵にくし

高知県 山 川 勝 子

曼珠沙華あわれ忍者の子に切られ
年頃が秋をきれいに着る和服
仮病とも知らず夫は粥を炊き

新居浜市 小 野 道 雄

手土産を出したでお茶も入れてくれ
へそ曲りつばなしの五十年
給料日知つてゐるのに妻は聞く

新居浜市 日 浅 木 珍

おとなしい主人で養子かと思ひ
六十の私に母は菓子を呉れ
本工の知らぬ苦勞を臨時工

新居浜市 白 旗 之 石

目に光ある間鮮魚の地位にあり
封建の名残り背負うて牛使う
喰べ慣れたものはメニューに出ていない

新居浜市 長 崎 粹 園

父の日も父は一人で酒を飲み
ウインドを見てから貯蓄の気が変り
急ぐのに虫めがね要る電話帳

宮崎市 野 口 卯 之 助

本妻につらく二号に目を細め
仕末書へ巡査がペンを貸してくれ
惚れているチップが帯へねじこまれ

京都市 大久保安彦

人生の余白ひねもす石磨く
あと幾日ことしの夢は夢のまま
アルバムに恋のミイラの若きまま

香川県 三井 醉夢

八十七才祖母逝く

水泡にいのち見つめて夜の虚空
半生を孫の私に賭けて逝き
長命をすまなさうに臥した祖母

仙台市 平野 光道

地下足袋のしめり冷たくコップ酒
二三人失恋させて栄転し

松原市 谷垣 史好

ふところ手ついでにヘソを撫でてみる
カマキリをバラバラにしてまだ無聊

羽曳野市 今井 岳太

四ツ葉さがして少女平和に育つて居
女手に間に合う仕事のむつかしく

倉敷市 水谷 谷水

縁談があればあつたで落ち附けず
銀婚旅行二年も先きの念を押し

新居浜市 豊田 志津

夕焼けが染めた顔ではない動悸
心配をさすだけさせて子は眠り

新居浜市 岡部 月下

城山をおりても同じ土産もの
切手貼るのを忘れてたラブレター

新居浜市 高石 斜子

採集の名で昆虫が殺される
魚買うたことを隣の猫が知り

出雲市 森山 健太郎

僕の夢笑わないのは母一人
見合した頃の背広をまだ着てる

尼崎市 吉川 いつ子

お伽の城建設中のヘルメット
大安を信じた縁談こじれ出し

島根県 竹内 李朋

ライフル魔も特攻隊も十八九
白痴化と云う番組に又坐り

島根県 鈴木 村諷子

胃袋はいやなお世辞と思うらん
勲章は飾つとくもの戦後から

愛媛県 河本 南牛史

近道で出会いともない人にあい
本当の水の味知る滝に着き

七尾市 松高 秀峰

成績の順でなかつた同窓会
子供連ですかと間借り断られ

河内長野市 森 本 黒 天 子

編ものは寄りつく隙を見せていず
はころびを器用貧乏な手でなおし

松江市 門 脇 無 風

来院の妻は季節の花を分け
田舎者それでいいのさ山の幸

大阪市 佐 藤 勝 利

ぬかるみに落ちた車のハネを受け
アルバイト冬の分まで早や頼み

大阪市 森 本 良 夫

嫁く先は何は無くともさしむかい
待つて居てくれた机や椅子をなで

八尾市 宇 佐 見 彰 大

定年で行くところもなし神詣り
物騒な客には運ちゃん話かけ

松江市 岡 崎 祥 月

気をつけて気を附けて居ても事故
割勘に決めてどちらも飲ける口

堺市 斎 藤 雨 中 庵

秋深しまた肥えて来た鏡見る
年輪が寄らば大樹の退職金

玉島市 井 上 旭 峰

明日という日へ人間の顔で寝る
指名され音痴拍手の中に立ち

羽咋市 三 宅 ろ 亭

一ちゃんになつても百姓まだ続け
上役は上役らしい印を押し

大洲市 堀 内 曉 風

素志いまだ曲げず雑音寄せつけず
七転八起き振し出しから始め

松阪市 萬 濃 修

瘦せたとも云えず血色はめておき
善人の自信やたらと腹を立て

大阪市 藤 富 淀 月

すぐ行くと電話を低い声で切り
アルバイト二年 市内もほぼ覚え

大阪市 古 川 静 波

散る枯葉残る枯葉も楽譜めく
添えぬ恋だから刺激がきついのか

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊

煙の出ないロースター秋刀魚の味は落ち
眉寄せて見たが結論遂に出ず

大阪市 加 川 大 然

誰が似ぞレモンの願の愛らしき
郡山市 中 内 孚 彦

茨木市 高 木 繁 太 郎

台風が戸木倒した俤のみち

近作柳樽選後感



園松小沢菊

近作柳樽に就ては、十月号に川村好郎選者が、詳細丁寧に述べて居られますから、何も申上げることはありません。元より此の欄の性質から、相当の作句経験を有せられ現に各方面に活動して居られる方々もあれば、川柳的に至極浅い経験しか持つて居られない初心の方もあり、言わば玉石混濁のかたちで、上下の幅は可成り相距たつて居ります。その中から、各個々の少しでも良いものを見つけ出すと言うことは、なかなか骨の折れる仕事です。

老若男女、境遇も、環境も、性格もみな違ふ人達が、同じ川柳と言う分野で自由に発表する作品は、実に春花秋草を一時に見る趣です。捨て難い芳香が馥郁と匂っているものあれば、いかがわしい雑草も数多く見受けられます。その中から丹念に一本一草を取捨しました。誤字、当字も沢山ありました。不安な字には辞書等で少しの努力で解決することですからご注意下さい。小生自身も今後一層努力するつもりです、皆様のご精進を期待しております。

新居浜市 丹生谷 猫いち
照れ臭ささ飲んで知らぬ特級酒
竹原市 三宅 紀世美
ホームドラマのようにはいかぬと娘を叱り
伊丹市 芳岡 正弘
口笛で隠す虚勢を見すかされ
出雲市 宇畑 一男
繕いの姿が似あう母かなし
布施市 坂上山 椒坊
鍵つ子へおやつのこと書いておき
大阪市 米浪進之助
遠慮する事を覚えて娘ははたち
大阪市 谷沢源川
八ツ当りされて見舞の客帰る

大阪市 木村 久子
停電になつて話の腰が折れ
大阪市 木村 濁水
遠まわりして虫を聞く散歩道
大阪市 柳生 政夫
晩酌をテレビ相手にする孤独
布施市 伊賀 鈴
気がつけば嫉妬の酒に酔うていた
徳島市 米田 美佐
見てるまに反古の山なる芸術家
大阪市 吉田 ひろ
七面鳥みんなだてて聖しこの夜
布施市 吉岡 嘉子
誤植だらけのような人と添い

川柳漫釈

小畑自由朗

① 「百姓やさかいにと云うたかて、そんじょ
そこのドン百姓とちごうて、クラーまで
つけてなさる程のおうちだっさかいな」
「だって、田んぼには、クラーはついて
ないでしよう」

「はあ？」

クラーもあります農家嫁探し　みのる

② 「おいウ、あわてるのもたいがいにせんか
い」

「そんな事云いはったかてあんた」

「阿呆ウ、座ぶとんやないかい、トランク

へ詰め込んでないすんねいな」

「そう云うてなはるあんたこそ」

「呀ッ、こらいかん」

「トランクがニャンニャン鳴いて動き出し

よりましたがな」

駈落ちのように危篤へ荷をまとも　桂仙

③ 「君、ガムがすきなんだね」
「別に、すきって程のこともないんですけ
ど。あなたは、おきらい」

「いいえ。嫌いってことはないんだけど」

「では、これ、召上らない」

「有難度う、いや、いいんです」

「まあ、そうおっしゃらないでよ」

「それよりも」

「なんですか」

「君が噛んでるのを」

「えっ？」

「いや、いいんです」

「？」

ガム噛んで逢ってる恋のまだ素直　柳児

④

「永らく、御世話になりましたが」

「明日は、御退院なさいますのね」

「とうとう、大阪ともお別れです」

「九州へお帰りになつてしましますのね」

「……………」

「私、看護婦なんか、止めてしまおうかし

ら」

「な、何故です」

「それとも、九州のどっかの病院へ代って

行こうかしら」

「有難う。そうしたら僕、もう一っぺん病

氣して、その病院へ入院させてもらいます」

退院を延して欲しい仲となり　正則

⑤ 「さあ、どうぞ。校長先生からお詰めなさ
って」

「いや、それでも会長さんが」

「なーに、あいつはよんべ、二階からこ

げ落ちて、背骨を折って腰を抜かしてしもう

とりまんやさかいに」

「弱りましたな。今度の体育館の改築には

何んと云ってもあいつの、いや、会長さんに

一つお骨折りを願おうと思つて居りましたの

に」

「はつ、はつ、はつ、それにあいつ、自分

で自分のお骨折りを先にやってしまひよりま

したんやさかいに、お話になりまへんがな」

P T A 上座を明けたまま会議　秀峰

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

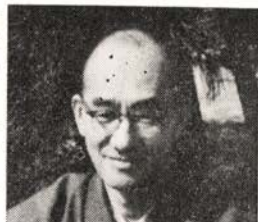
大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 三四五二一四

夜間 四四〇八

雅号ぶっちゃけばなし (3)

マサト・スイキヤク



まさもと・すいきやく

SUIKYAKU

・正 本 水 客・

水は何時いかなる場合にも自分というものを失わない。形や姿は時にしばられることがあっても本来の姿は静かに秘めている。黙々と流れて自分を傷つけることなく、他を傷つけることはない。時に荒れ狂うことがあっても、それは水本来の心ではない。先人の長く歩み流れてきた跡は大事に守ってゆけど、淀み曲り奔騰して新しい道をひらくことも忘れない。その水の心を心とする者として水客の名が生れた。字典によると、水客には菱の実という意味があるという、夏水の上に白い花を開いて菱形の実を浮べる菱である。それも又いいかも知れない。

会社員、五十八歳

「おばあさん、僕いよいよ免許証を取りましたさかいに。これからは僕が運転して、何処へでも乗せて行っただげな」

「めっそうもない。私が焼場へ行く時だけは頼みますけんどな」

祖母にまでみせる車の初免許 八九寸

「君の雄弁をもってすれば、こっちの方へ千票や二千票、流れ込ますのん、わけもへちまもあらへんやろう云うてな」

「阿呆な事を」

「いやほんまに。先生も君の雄弁にはあんじょう惚れ込んでしまいはって、是が非でも

頼んで来てくれと云はってな」

「そんな事云うたかて、今まで、君等のその先生の、反対候補の応援演説をして廻ってたんやさかいに」

「なーに。こんなどさくさに、そんな事ぐらい、どっちこちあるかいな」

雄弁をおだてて選挙に狩り出され 杏花

⑧

「ちょっと、ものをおたずね致しますが。この辺に吉田さんと云うおうちにはございまへんやろうか」

「吉田なら私のうちでございますが」

「呀ッ、いえ、それがその、吉田さんやの

本誌の投句には

なるべくご利用ください

川柳雑誌
特製

柳

箋

一冊(五十枚) 三十円
送料 二十円

うて。佐藤栄作さんと云うおうちでございませうが」

「佐藤栄作さん?。聞いたようなお名前ですけど。ちょっとお母あさんに聞いて来まさかいに」

「いえいえ、それには及びまへんで。いやこりやどうも、おおきにお邪魔を致しまして家を問う振りて娘が下見され 圭井堂

⑨

「ちょっと、こう真直ぐにして居てもらいまへんと」

「そんな事云うたかて、これからがええところやがな」

「私が見といて、あとでくわしゅう話をしたげまさかいに」

「むちゃ云いな。おっさんにそんな見もって顔を刺られては、刺られるわしがたまつたもんかいな」

テレビ見る顔捻じ曲げて床屋剃る 光郎

川柳塔と

川柳の使命

唐崎 專 翁

日本の商都、大阪のド真ん中から、新しく
発足した、川柳塔第一号は、さすがに礎石川
雉と路郎師の流れを汲む、堂々たるベテラン

揃いの編集だけあって、能く充実し良く整っ
ていた。

殊に、麻生霞乃師の《生命の一頁》は、眩
しい位の光彩を放った真に世紀に伝わる不朽
の美文であると私は感銘した。

追がに、路郎師と共に、尊くも生涯を懸け
て川雉の精神基礎を築き上げて来ただけであ
つて、川雉の復活たる、川柳塔に、光明を輝か
し且つ、新生命の息吹与える、助産役として
充分であつた。

斯くて新生された、川柳塔の新生命の躍動
と成長には、驚異の衝動たる、触覚から、光
りの視覚に初まり、栄養補給の味覚、聴覚、

雅号ぶっちやけばなし (4)

モリモト・ホーセンシ



・森 本法 泉 子・

大袈裟なので、昭和七年再び句作をはじめた時に思い
付いたのが今の法泉子。
羅生門——中学時代、学友小田無
鉄砲がつけてくれた号——があまり

就職難の卒業期が近づくのを感じつつ、微くん、寮
歌をうたいながら暗い夜道を帰っていった下宿。そこ
が山口市法泉寺の町だった。山口は町全体が本当に静
かだった。殊に法泉寺は狐、たぬきも出て来そうなさ
びしいところだった。なつかしい町だ。

去る七月高知へ出張の際、同期生梅田君を四国銀行
本店に訪ね、三十三年振りに語りあった山口高商三
年の学生々活は楽しい思い出ばかりだった

鳥取県信用保証協会業務課長。五十七才。

嗅覚の、五感を刺激しつつ躍進と成長を続け
るであらう。

そして、之れを、愛し労わり育くむグルー
プたる社会人、特に文芸愛好家と柳人達の、
愛撫と信頼を期待しつつ、立派な成長の課程
を辿るは明白である。

凡そ、人間は、動物でも禽獣と異り、万物
の霊長として特有の精神力が伴い、その精神
作用たる中枢神経機能に依て、思索考想に進
む、更に精神力とも霊的信念ともいえる、五
感覚以上の第六感覚の詩情乃至法悦境域まで
到達なし得る。

この超精神の涵養と陶冶に当るべき処の、
心理学は文学科に属するように、第六感のイ
ンスプレッション（靈感）作用は、文学愛好
者に取っては見逃せないものであらう。

川柳は、ご存じの通り、江戸時代に発足し
たが、元來、日本古代の和歌の中での短歌た
る三十一文字の、上句十七音と、下句の十四
音に分離したもので、特に俳諧狂句から転じ
た。冠りつけ冠句から逐次発達し、特に、浅
草の名主柄井八右衛門雅号川柳師の選句柳樽
からの流れで以來二百有余年の伝統を保つ庶
民文芸である。

当時、徳川幕府の封建制の言論忌弾の時代
にあって言論不自由の中を特に軽妙、洒落、
滑稽、機智に富んだ短句を以て、社会風物を
批判し、ユーモアとウィットに、世人を精神

雑 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

寒 霞 溪

高原の秋思うぞんぶ呼吸をすい

美しの原

展望をするだけで車をまたす

的に指導する国策に順じた為に、上下階級に波及と流行を招来したものであった。

曾て、京大の教授、桑原文博師の言に、短詩型文芸は、一般文芸に比して、第二芸術に過ぎないと批判されたこともあるが、例え第二第三芸術であろうが、川柳には川柳の使命がありロゴス文学中の短詩型として最も技巧趣味の豊富なものとされている。

斯うした見解から行き進むと、遂作風を詩情豊かな文学境地へと、上を向いて進歩したくなるのであるが、やはり川柳の領域と使命があると思う。

嘗て川柳の風格を向上改善なすべく、川柳を改名して短詩文芸を企図した同人結社もいたと聞く。また近代の作品には、そうした傾向が見えているが、余り突飛な躍進脱皮改革は寧ろ、角を矯めて牛を殺す、というような例に墮し終るかのよう思う。

仮に、蟬が繭に、繭が毛虫に、毛虫が蝶に美化したとしても、蝶は毛虫の卵を生む、還

寒霞溪馬糞も匂う山を降り
オリブが匂いますとて駅まですみ

名古屋市長 谷川 鮮山

背負い切れぬ程の肩書隠居さん
ダイヤの値巾の広さを見て帰り
見逃がしてほしいベコベコ免許証

元的宿命を持つ、生態本質の性状を脱し得難いものである。自然の時季を待つことなく、毛虫を蝶に見せたく燥焦的に無理してまで、川柳の中から、散文詩や非十七音短詩を敢て誇示せなくともよいのではなからうか。

川柳から生れた変体短詩の奇形児は見苦しいことと思う。如何しても上品に進路転換を望むなら、新体詩であろうが、創作であろうが、第一文芸の広い世界に雄飛すればよいと思う。やはり短歌は短歌、俳句は俳句、川柳は川柳と、牛は牛づれ、馬は馬づれと、同族仲よく平等平和に共に歩むのが、真善美であると思う。

兎に角、川柳は川柳の生態性状の範囲として、凡そ、その使命としての、軽妙、洒落、滑稽、機智等の許された融和と応用と円満なる川柳庶民否文芸愛好家大衆の、憩い場となるのは、吾が、川柳塔に附与された、天来の使命ではなからうか。

川上三太郎の川柳論

川柳への愛と痛烈なえぐりの
金言集

この道

川上三太郎単語集
大野 風太郎編

集録単語 二〇〇

B6・横開き 一三六頁

天金装・函入り愛蔵本

本文・コットン紙二色刷

五〇〇部限定(番号入り)

定価 一〇〇〇円

送料(書留) 一〇〇円

予約受付中

(定価に送料を添えて発行所宛お申し込みください。)

発行所 柳都川柳社

新潟県新津市駅前通り
振替 新潟 一六二〇番

麻 生 葭 乃 選

「赤」

赤い血が燃える日もあり斗病記 清子
夕焼けの赤さへ鍵っ子立ちつくし
ルージュ濃く嘘も平気な夜の蝶
赤い実がひよつこりのぞく秋の山 きさ子
赤札へあきらめ切れずまた戻り
じゅうたんの赤延々と展示会
赤布のきてん衝突まぬがれる みさ子
赤とんぼ農薬反対の声もなく
にわとりも共同募金に協力し
名工の苦悩を思ふ柿の赤 阿茶
赤い屋根の文化住宅風に飛び
赤旗になびき母から遠ざかり 酔夢
同志愛赤々と燃え同棲し
女気の無いお隣のあかいシャツ あいき
赤旗をふる孫がいて寝つかれず
夕やけへ子に追われてる赤トンボ 一栄
モーニング目出度い酒に顔をそめ
彼岸花土堤を燃え立つ様に咲き 勝子
柿赤く枝も地につく稔りよう
献血を終えて家路にはずむ足 千夏

二月号発表「うどん」十句以内
締切・十二月二十日

堺市民

川柳大会から

八木摩太郎

10月31日(日)午後一時から堺市教育会館で第19回堺市民川柳の会が開催された。

早勢堺市教育長や高橋堺市社会教育課長も出席され、堺市民川柳大会では今回が一番盛会だった。

とくにこの大会で、川柳塔社主幹中島生々庵先生が柳話をされ、会場の柳人諸氏に深い感銘を与えられた。

麻生先生が「川柳雑誌」を創刊された当時、ご計画の中に「川柳に対する30年計画」というのがありました。

・第一期の10年間で
(川柳の社会化運動)

・第二期の10年間で

(川柳の量的発展と質的向上)

・第三期の10年間で

(路郎先生ご自身が自由な立ち場において川柳の研究に没頭したい希望)

などから「いのちある句」を作れと叱咤されたことや、ことに「いのちある句」をせめて一句でも残したいものと、生々庵先生は力強い口調で語られたのである。
最近堺市民の川柳熱が向上し、成人学校に川柳講座も採入されたほどである。

「川柳雑誌」のバック・ナンバー近く整理いたしますので、ご入用の方は至急お申しこみください。

取次所 川柳塔社

営業所

阿倍野店

堺店

住吉店

平野店

都島店

蒲生店

十三店

九条店

credit system



丸 越

電話—622—0015—7

良いよい
良い安い
月賦百貨店

教室句作

研究題「掃く」



掃くという課題から思いつくことは枯葉である、その枯葉を掃くことの動作だけを説明しては句にならない。矢張り作者の主観なり主張なりを読むものに感じさせる表現が必要である。

落葉掃く尼僧へ嵯峨野暮れかかる
落葉掃く尼僧へ今日は便り来る

K S

こうした句には作者の感情がない。尼僧によつてものあわれを感じさせようとすると、ずるさのようなものを感じるだけである。

永平寺修業の一步庭を掃き

静座して心塵を掃き写経する

みさ子 句楽坊

この句の場合の永平寺はあながち永平寺でなくともよいのだが、作者が永平寺しか知らなかったとしても永平寺によってその修業のきびしさを感じているのである。次の句の静座しては精神的な掃くである。作者が老僧であるのを知っているだけに心を打たれた。

清浄に掃かれすぎて物足らず 真砂

清水白柳

古寺を掃く人もなし落葉積む
掃いた目に芸術がある石の庭

晋 弘 嗣 生

どの句にも作者の感じが出ていない、出ていても弱いということである。その弱さは句を奇麗に見せた為であろうと思う。どきつい表現もこまるがあまりに奇麗なだけでもない。

駅員の箒にご乗客追われ

国鉄のサービスクの足を掃き

S Y

掃いて行くあとから吸殻もうほかし

オガ屑のスリルラツシユの隙間掃く

快速車車内掃く人やはり要り

箒持つ車掌に足をもち上る

雄 保 声 士

駅員の箒という句は誇張が少し過ぎたようだった、それにご乗客というのもおどけていっていけないと思う。国鉄のサービスクの句も同じことが言えるのではないか、客の足を掃くと面白がっているの尚そういう感じにするあとから吸殻をほかしてという句には、公

徳心というものが現在の世相に作者は批判の目を投げかけているのが判る。オガ屑の句は駅のラッシュもやや過ぎた頃の風景であるそのオガ屑が真ッ黒になっているのも作者の目にうつっているのだ。快速車の句の快速車は急行でもないし特急でもないのだ、とにかく鈍行ではない。その行儀のよさそうな快速車のお客も矢張り日本人のだからゴミを出すそこに作者の怒りの気持を知ることが出来る箒持つ車掌という句は、車掌にこだわったのだが、どうだろうか、車内の掃除をするのは車掌ではないのだが、ローカル線ならこうした事があるかも知れない。作者は足をヒョイとあげて掃きよいようにするという温かい気持の持主なのである。

掃き捨てた塵から拾うネツクレス

掃きだまり母はヘアピン拾い上げ

掃き出せば子供の中から拾い

ネツクレスの句には何故かわざとらしい感じが感じられるようでスッキリしない。それはネツクレスの値段が安価なものではないと思えるからで、その点から言うところヘアピンの句には実感性がある。私の家でもヘアピンでよく娘が叱られているのを聞く。くらしの垢という句は太へん苦労した文字を使っているが、その苦労の割に垢というのが胸を打たないのは作為が表面に出すぎているからではないだろうか。子供がその中から拾いという句には

共感が持てる。子供の拾っているものがそんなに大切なものでもないのに、あわてている姿まで出ているのは実感だからであろう。

人間の丸さ四角を丸く掃き

目放なせば子供畳を丸く掃き

なき刀のホーキ使うて丸う掃き

隅ずみがあかぬけしない娘の簾

ほめてくれた母ちゃんがまた掃き直し

女房が掃くところと何処となく違い

丸う掃きという句は古い句に「居候四角い

座敷丸く掃き」というのがあって、いつまで

もこうした着想にこだわってはいはいけない

あかぬけしないという句も、そのへんからあ

まり抜け出していないと思う。ほめてくれた

という句には、子供をうまく使いこなす母親

の姿がある。こうしたところから子供はだん

だん成長してゆくので大切なことである。女

房の句には年季の這入った句の仕立方を見る

ことが出来る。それは、何処となく違いとい

う立派な句語があるからであろう。

掃く癖のとおりに掃ひん曲り

掃き癖が袋かぶつたまま曲り

どちらも同様の句なのだが、前の句はその

まます詠んでいるのだが、次の句の袋かぶ

ったという句語に、その家の雰囲気を感じて

いるのがよかったと思う。

座布團で身辺を掃く不意の客

掃くだけが精一杯の男子寮

むつつりと男寝巻きて朝を掃く

安彦 弘生 隆史

座布團の句は軽いスケッチである。不意の客がどんな客であったのか知らないが、あわてている姿をよく描き出していると思った。男子寮の句は男の句いがアプンしている。拭き掃除は一週間に一度位いオバサンがしてくるだけであろう。古方さん句に「掃くのがじゃまくさいから吹いた」という面白い句がある。男寝巻きでという句はいいと思った、むつつりとという上五文字にその比重がかかっていて成功しているのであろう。掃き掃除してアパートにない庭を掃く 孚彦 街を緑にというのが大阪市役所の玄関に大きく掲げてあった。アパートは凡そ緑に縁の遠いところに建っているものだが、こうして掃く庭のある故郷を持っている幸福を羨しく思うのである。

アベツクの句い女中は掃き捨てる 李羅 ホテルの従業員なのであるが、そこにはねたましさと羨しさとが同居していると思うのだが面白い句である。

押売へ妻大胆に掃きたてる 保夫 掃除器だところはゆかない。こんな句もある。

掃く為の箒とばかり思いしに 八郎 夫婦喧嘩のことかも知れないが着想の古さを表現でカバーしているだけではない。

あの音は何さと響なつかしみ 万平 この句には集点がボヤケたような感じがした。句意は判るのだがハッキリしない。

電化でも庭掃き箒はひとつ要り 千夏 これは実際の出来事なのだが、その報告のような気がする。作句に馴れてくると同じことでももっと深い句になる筈である。

天井を掃くのに霧見直され 弘生 そうでもないと思う、掃除器で天井を撫でるという手もあるのだが。併し句は面白い。

掃く間抱いておしっこかけられる 要次 若いパパとママの出来事なのだ。箒でなくて掃除器を使ったのだらうと理屈を言っている。

もう二度と来ると掃いて塩をまき 李朋 よくも嫌われたものだ、塩だけでなくて掃いたというのが念入りで面白い。

掃くわよと日曜楽しく起される 与志 霧間気をたのしく描き出して成功した句。

好一番土俵大きく掃き清め 八九寸 物言いの捌きがついた土俵掃く

前の句の大きく掃くというのが句主の目の届いたところだが、後の句の捌きがついたという着想にはかなわなかった。

逆転のどよめき冷くベイス掃く Y 無死満塁ホームベイスを掃くタイム 李朋

逆転の句の冷たくという語に作者は集点をしほったのだが、生きてこなかったのが惜しい。無死満塁の句はその興奮を冷静に見まも

っていて成功していると思う。

むつとして帰れば掃除行きとどき 周甫 ちがう味を持った句であってそこには作者

雅号ぶっちゃけばなし

(5)

ムロイ・ハクスン



・室井八九寸・

むろい・はくすん

と自称している。八九寸——いろいろとお読みだいていようですが「ハクスン」

少年時代から今以使っている別号「白癡」(はくしゅん)に語呂を合わせたのと、また私の出生が一八八九年であるので末尾の二字を採ったわけとしては向きの理由、実のところ私は薄字は己むねとして、他人の尺に足りず、身びいきにみても精々八九寸程度なる自己評価からの命名、しかし決してこの尺不進に諦観、満足しているわけでもなく、常住坐臥努力精進何となく世間通例の水準でなく、常人坐臥努力精進いたしたく、舊剣老驥に叱咤鞭撻を加えいる次第であります。

「台風に耐えてあさがほ白う咲き」

職業 会社非常勤役員(実態は無職)
年令 七十七才(正しくは明治22年12月9日生)

のするどい眼があるのを知ることが出来る。

首筋を掃くにも床屋上手下手

柳太

古句の匂いを持った句で余り好ましくないが着想をこまで拵けたのは作者の手柄。

掃き寄せた落穂に雞からみつ

茂

農家の庭先きのことなのであらうと思うがそれ以上のものを持っていない。

体育祭明日へ校庭掃く砂塵

章雅

熱燭を欲しさに紅葉掃き集め

専翁

どちらもあり熱の這入っていない句であって。取立てて言う程のものがないのではない

か。かんぱんの一人のこして掃きはしめ 李朋

小料理屋の情景をキャッチしていて面白い掃くゴミも縄縄の間屋街

茂

念入りに掃いて露店は今日も売れ

保夫

縄という字をたたみこんで情景をあらわしたの凡手ではないと思う。露店の句もよく詠んでいる、念入りにという語と今日も売れという下五文字の結びが佳句にしたと思う

砂ほこり立てて清掃掃きまくり

酔升

道を掃くだけでも都会暮らし立ち

みさ子

市役所の清掃にたずさわっている人達のことを詠んでいるのだが、傍観的な句だけという一つ深さが無い、もう少しその人達の生活にまで思いをさせて句にしたいものである。

庭先の掃き目の跡で家風知り

松風

不治のガン知らず姑は庭を掃き

春雄

お隣りへ箒をのぼす祖母達者

旭峰

飛んで来たごみは隣りへ掃き戻し

あいき

これと同様の句が沢山あったが殆んどが説明に終っていた。この四句は、家風を知ったということや、ガンの如きということなどに着想の佳さがあつた、お隣りへの句はもう詠みつくされている。最後の句の掃き戻しというのは作者の目にたしかさがあるので佳い句になつていふと思う。

板の間の箒が隅でひつかかり

柳太

軽いスケッチであるが何かそこに面白さを感じさせられた。

憎み一掃恋愛もよしデモもよし

孚彦

掃くという字を使った句だが若いセンスに同感したのである。

私の句が出来なかったので古方さんの句を御参考のためにのせることにしたので、あしからず御ゆるし願ひたい。

日曜の暇を寒水掃いてみる

古方

送り出したあとの箒は歌になり

同

二月号発表・締切十二月二十日

研究題 「注意」 五句以内

三月号発表 五句以内

研究題 「似合う」

締切 四十一年一月二十日

宛先 大阪府南河内郡美原町丹上四〇四

清水白柳

今月も投句を合わせると八十名近い盛況である。川村好郎氏の柳話は定評があり、カルメラ焼きから人生のあり方や作句態度にまではながしが発展して、新人にもベテランにも好評だったことはさすがである。

倉吉市の奥谷弘明氏が出席された。これからも遠来柳人のご出席をお待ち申しあげる。最近では若い方のご出席が多く、句も若さにあふれているのが目立った。(河井庸佑整理)

出席―梅里・古方・静馬・万の・双葉・弘朗・一三夫・白柳・奈良子・野添路・専翁・与呂志・八郎・一乃字・孚彦・柳宏子・惣治・改め鉄舟・水客・柳志・一舟・志朴・正典・改め静歩・一歩・素郎・誓二・愛論・葛城・いさむ・醉升・弥生・滋雀・多久志・生々庵・白溪子・たつみ・客遊子・好郎・文秋・定男・すむ・鳥荘・句楽坊・有子・泉陸・すみれ・不折・弓彦・舟遊・庸佑・小松園・清人・金三・春巳・あいさ・恒明・進之助・みさ子・天樹・形水・季賛・

席題「マイク」 児島与呂志選

緑日のマイクひねもすがなり立て
真実か知らんがマイクふるえて居
勝つた方ばかり聞いてはいるマイク
千秋楽マイクで囲む勝力士
連敗の横綱マイクへ背を向ける
せきばらい日本中へまきちらし
かくしマイクうつかり築屋へ忘れて来
組合の役員らしいのがマイク持ち

葛城 一舟 庸佑 栄一 三夫 静歩 一乃字 弓彦

まだ息をはずませてるにもつマイク
避難命令のマイクを干切る風の音
ぶつつけをききにマイクへ美味言
カメラルボかしくマイクというスリル
感激の音がマイクへ絶句する
インタービューこんな顔へ来たマイク
マイクだけが僕の気性を知ってくれ
マイクつぶれないかナエレ千つづく

席題「意地」 海士天樹選

意地すててこの子と稼ぐ握り飯
意地はつて見ても女という悟り
にせ物と知ってる 仏像手放さず
下積の無口に意外な意地があり
意地張つて別れた夜のひとりぼち
意地捨てて会いに行く日の薄化粧
養老院に行くに結局折れた意地
正月の意地をみそかでかえしたる
意地捨てた落目はつらい金をつけ
貧乏に馴れ 胃袋が意地をはり
ライバルへ職場の意地を持ちかえり
ふるさへたでは帰れぬ意地があり
意地だけで女は生きている 釜が崎
うな井を三杯たべる 破目になり
意地づくで貰うた妻と家裁に来
医者までが感心をする意地はばり
意地つ張り通して呉れたとは知らず
功成つて昔の意地を詫びに行き
意地だけ女立派に子を育て
意地通でからたがいつて来てくず
意地悪で通りさる顔を持ち
その意地が今菊薫る日の叙歎
意地張るもよしご飯をたべときや
意地つ張り好きと言えないまま別れ

泉陸 古方 静歩 清人 柳宏子 進之助 季賛 与呂志

席題「早口」 奥谷弘明選

早口な割に動作の どんかんな
早口に たつた一言好きとだけ
合の手を入れる 早口だけ聞こえ
早口の機嫌へ馴れている 無口
早口でそつとさやく目が笑ひ
早口が 追分 唄う 悠長さ
早口へ 今日も 手を 焼く 速記録
早口も 親ゆずりやで 気にしなや
早口の講義へ メモが ついてこず
上役の 早口へ 生返事で すませ
早口で 泣いて 笑つて 帰る なり
もう一辺聞き なおされる 妻の口
早口の とこまで 母に 似て 育ち
早口の くせに 食うことだけは ヒリ
悪妻へ 苦しむ 返事は 早口で
早口で 言うから どもと 妻おこる
早口で 言うて 我が 身の 置き処
早口を 妻は 合点して 舌をかみ
早口を まねたばかりに 舌をかみ
早口へうなずいて いる 聞き上手
先生の 早口 生徒 が まねを する
早口を 人間の 軽さに み ら れ
たたき売り 早口に 文句ましく 立て
早口が 又 叱られて いる 受話器
早口がおつちよこちよとして 見られ
早口で 言うだけ 言うて へいごめん
早口で 急所を うまいこと に げる

梅里 白柳 多志 清人 鉄舟 泉陸 柳宏子 文秋 一三夫 与呂志 静歩 奈良子 生々庵 葛城 進之助 小松園 弥生 弘朗 水客 不折 たつみ

一乃字 水客 進之助 生々庵 天樹 朗選 一乃字 春己 泉陸 白溪子 滋翁 進之助 与呂志 庸佑 水客 季賛 与呂志 客遊子 八郎 葛城 不折 春己 双葉 愛論 孚彦 誓二 進之助 進之助 古方

早口の人にいきなり突き当たり
万才になれと早口笑われる
早口の割にのんびりした男
早口な男で汗を拭きどおし
早口で女が誘う部屋の間
ゼンヤーマ混ぜて早口に言うてのけ
早口もここから私のペースにし
聞き返され聞き返され早口でもり出し
告白のムード早口またこわし
早口をたしなめられてどもるなり
早口で追い帰されて いるような
売声の 早口 なのは 生きがよし
早口へところどころは 感できき
早口ではおまへん河内の舌たらず
早口のくせも 子供の頃の まま
早口を 勘で聞いとく 妻となり
肝じんとこ 早口で ごまかさ
早口がじんだ 踏み出す 面白さ

兼題「空」

森下愛論選

遭難へ空から念ず花の束
父逝きて 空見ることの 多き日
ハネムーン 親が不安の 空の旅
あのときは酔うてたからと空とぼけ
空からの 声に 日曜 起て される
碧空の底まで 背のびして みたい
空の青遠い 記憶の 中に 居る
言い負けた自問自答は 空に むけ
出迎えがまず ホットした 空の旅
二三粒 夜空に 雨が せきたてる
夕空に 安心を して 寿司を 巻き
空模様 又来て ほしい 傘を 貸し
ビルの窓矩形の 空が 見えるだけ
紅灯の ともる 空しか 知らぬ 眉
寒空に 深夜 作業の 槌の 音

小松園 醉升 庸佑 白乃 静歩 生折 弥生 失名 素柳 恒明 白柳 生々 梅里 滋好 弘雀 滋朗 多蘭子 繁太郎 清馬 静人 古方 舟遊 中性尼 中性尼 泉睦 好郎 柳志 鉄舟 素郎 双楽

ヨイトマケ空の 青さへいどむ声
星空へ安緒の 枕リユツク 置く
俵が降つて 来そう な 青い 空
銀婚を 子に 飾られる 青の 旅
コスター空の動きかはげしすぎ
火事の空近いと寝間着のまま震え
晴れすぎた空で 病人気に入らず
空の 青雀一匹くたびれる

兼題「モデル」

阿萬萬的選

身が細るほどにモデルは最らせてい
デッサンを破りモデルを疲れさせす
相互も単なるモデルでない感情
モデル 地区 建材高で 質が 落ち
ババとママ モデルにされた 綴方
交通事故多いとこ指定するモデル地区
私服着てモデル 自分を取り戻し
モデル今日 花嫁衣裳 着せられる
カーテンの陰でモデルは脱ぎ捨てる
店先でモデル人形は衣 更え
モデル嬢の起伏も 処女で なし
モデル稼業自己を殺した非情の目
化粧品モデルにされて買わされる
ボーズ脱ぎをそろモデルの嘘となり
足の裏をモデルにすめで気が要り
アメリカをモデルにすれば金が要り
モデルの眼人を見返えす程に馴れ
モデルフツツ女房うつろするばかり
見つめられ裸で儲けてるモデル
体重をいつも哀にしているモデル生
ホルモンを打ち哀愁を知るモデル
モデル嬢 やつぱり 女芋が 好き
落選をして 私われぬ モデル 料
子役タター水着のモデルにまだ向かず
ベストセラーモデルは今も生きていた

一乃字 志松園 天樹 白溪子 滋雀 生々庵 愛論 多蘭子 小松園 花梢 三時 八九寸 章雅 東天紅 眉水 生々庵 与呂志 古方 白柳 柳宏子 愛論 千夏 句楽坊 鉄舟 双溪子 白溪子 いさむ

当然のようにモデルは脱ぎはじめ
モデルの娘ある一点を見て座わり
ライトの中モデルきわどいポーズする
ゴミのないモデルの町の住みにくし
交通禍皆無 受賞の モデル 校
殺しまで出して 防犯 モデル地区
モデルぐせづいてお見合いく々々し
モデル都市ざばらに僕にしてくれず
虚栄には遠い モデルの 肌荒れず
モデル今ホクロをかいて時間待ち
描かせたい笑顔で乳房の胸を張り
纏える日へ興味変えてるアラモデル
夫人美しモデルにされたと思ひ込み
モデル地区チャイム聞えて来る夜ふけ
グミ取りも当座よく来るモデル地区
救急車 モデル地区から出た 騒ぎ
バラバラにされてモデルは積み込まれ
落葉はくモデルにしたいような厄僧
モデル地区犬の散歩もままならず
モデルチエンジ社運をかけて出直す気

兼題「予想」

傍島静馬選

これを買え買えと予想屋買うていず
プレゼント予想したほど喜こばず
貰うまで予想はすまいボナナスの
予想した通り 夫はまた 遅い
人生を踏み外して から予想売
予想したとおりに息子敷かれとり
予想通り ゆかず 進学 又 遅れ
カムバック予想した程手が鳴らず
予想だにして 居なかつた 酒肴
予想屋が自分で買えばみなはずれ
入れも予想以上の 高値よび
ボナナスの 予想へ妻と子の予約
倒産の 予想 聞きつつ ひつかり

淡さ 舟 不さ 白扇 繁太郎 素歩 静樹 天論 愛翁 專客 水樹 与呂志 文秋 梅里 滋雀 鉄舟 静馬 的馬 萬 東天紅 三時 眉水 淡舟 静雀 柳志 客遊子 一三夫 双楽 好郎

吹くまに糸伸びてゆく奴
宿の下駄鼻緒の伸びたのがあたり
がめさき手本とて伸びた位に伸び
触角のようにでて虫眼を伸ば
思い切り伸びして起きた日曜日
包装紙勿体ないと伸ばす母
独身の空しさバントのゴム伸び
すくくと伸ばた息子に見おびさ
る芽に蟹の心がわかつて来
て先祖に申訳ない墓の草
間伸びして職人釣に行くと

東天紅 東天紅 八九寸 章雅 洛水醉 眉水 淡舟 多蘭子 花梢 愛論

最近の本社句会は市内の人より他府県からのご出席が多くなつた。

十月月会は倉吉市の奥谷弘朗氏をはじめ、奈良から草深醉升氏、中内亨彦氏、村上春巳氏、京都からは西村句楽坊氏などいづれも常連の方ばかりである。このほかに兵庫県から十氏のご出席があり、まったくおりがたいことである。欲をいえば市内の方がもう少しご出席ねがえらうと、より盛会になるのだが……（句会部）



東京大井店
数寄屋橋店

古文生弓生孚万生あ滋いみ不庸素す庸清
々々々々々いささ子折佑郎む佑人
方秋庵彦庵彦的庵き雀む

夜 警



直原 七面山 選

張り込みの 刑事 夜警に 怪まれ 卯之助
百姓を 嫌い 都会へ 出て 夜警 光道
おでん屋の 匂いへ 夜警の 足が 向き 魚山
台風 の 予報へ 夜警 氣を 配り 季賛
引継ぎが すんで 夜警は 眠むく なり 弘道
子の 寝顔 覗いて 今日も 夜警に 出 万竿
不覚にも 夜警 鏡へ ギョツと する 芳仙
こそ泥の 不運 夜警に 捕えられ 静水
年の 瀬の 夜警 冷たい 雪が 降り 季賛
女房は 炬燵 夜警の 足が 冷え 勝子
真夜中の デイトへ 光る 警ら の 眼 専翁
武装した 夜警 ネズミに からかわれ 幽谷
暗がりの 巡視 警棒 握りしめ 代仕男
盗人の ように 夜警も 忍び 足 句楽坊
間違いの 電話に 夜警 馴れている 保夫

夜警ふと元の 刑事の 眼に 戻り 保美
クジ運が 悪く 大晦日の 夜警 健太郎
警官三十年 今度は 夜警として 勤め 雄声
手ぐすねを ひいて 夜警は 有段者 進之助
人を 恋う 仔犬 夜警の 後を 尾け 静水
夜警ふと 不純の 恋を 見てしまひ 代仕男
詩情無き 夜警へ 月が 冴え 渡り 可住
夜警する 留守を 狙われた とは 皮肉 独仙
十五夜を 背に 夜警の子が 帰えり 李朋
新婚の 窓へ 夜警が 声 を 掛け 幽谷
亡き妻を 偲ぶ 夜警の 夜の しじま 雄声
いつしかに ネズミ 夜警の 友となり 雄声
歳末の 夜警に からむ 千鳥 足 弘道
柔道は 二段 自信の ある 夜警 卯之助
アベツクを どなり つけた くなる 夜警 弘朗
巡回から 帰つて 続きを 聞く 夜警 古方
夜警の 灯に 恋の ムードを こわさる 初甫

佳

世捨て人 みたいに 夜警の 無表情 恵二朗
物音に 夜警 木刀 持つて 立ち 勝子
息つめて アベツク 夜警を やりすこし 万竿
首吊つた 所で 夜警の 足 乱れ 芳仙
火事跡の 夜警 ふるまい 酒に 酔い 恵二朗

人

格闘も したと 夜警の 武勇伝 進之助

地

身寄り 無い 夜警 女工に 親しまれ 保美
捨て犬に 慕い よられて いる 夜警 恵二朗
新聞を 隅から 隅まで 読む 夜警 軸

ウ イ ンド

田村 藤波 選

この娘に 着せたい ウィンドの イヴニングドレス 鶴丸
ウィンドを 破つて トラック 訪ねて 来 七面山
ウィンドで 夫婦 あれこれ 言つた だけ 千翁
ウィンドを 覗いて BG かしまし い 勝子
ウィンドへ 血走つて いる 女 の 目 千翁
ウィンドも 師走 マネキン 毛皮 着て ひさ英
ウィンドで パトロン 覚悟 させられる 無風
ウィンドは あぶなつかしい 時計 商 卯之助
ウィンドは 庶民の 夢の 見るところ 静波
ボーナスまで 待つて いて ネと ウィンド 光道
ウィンドの 値札も すねて 裏を 向き 秀峯
ウィンドの 宝石 みんな 消え ちまえ 専翁
ウィンドへ 勝負を かけた 三代目 保美
出直せば ウィンドの 品売れて なし 可住
ウィンドの 値を見る 心 プラへ の 同伴 八九寸

佳

商魂はウインドすでに春景色
ウインドに飾る値段は 高う つけ
ただならぬ仲とウインドじつと見る
ウインドに鼻すりつけて子がねだり
夫婦はなればなれにウインドが違ひ
ウインドを覗いて歩く趣味をもち
ウインドが 画一個性のない 団地
ウインドにおでこをつけたらしハ跡
ウインドの妻の 吐息が 追ひ縋り
羨望の 溜息に ウインドが 曇る

弘道 李朋 健太郎 章雅 雄声 初子 宗太郎 保夫 あいき 季賛

抵抗をウインドに見る 反抗期
倒産の危機へウインドそのまんま
ウインドに背むけた孤児の眼かきひし
ウインドにおわします百万円の石
ウインドに 六連発が 光つとり
ウインドのイミテーションにほしい湯気
ウインドを のぞいて 女火を 燃し
ニューモードウインド一ぱい幅をとり
ウインドの見本通りに着こなせず
ウインドをとおしてパントマイムを見
ウインドを出て宝石の 日々 孤独
ウインドへ 大正末期が 舞い戻り

進之助 淀月 句楽坊 可住 幽谷 芳仙 静水 古心 弘朗 七面山 文庫 恵二朗 千翁

地

ウインドに高嶺の花が咲きほこる
天
ウインドにまたあり今日も見てもどろ
軸
ウインドの金紗が女の瞳をうばい

云いわけ

長谷川 三司 選

云いわけの素直丸刈り撫でてやり 八九寸
言いわけを考えている 電話口 秀峰
云いわけを しての 男のずるい顔 凡子
看護婦にも云いわけもする快復期 李朋
この人も言いわけと 知る 赤電話 進之助
つじつまの合め言いわけしてしまひ
云いわけに 苦しいウノもちよつと混ぜ
ツンとして女云いわけきいており 幽谷
言いわけを 考えながら 酒を 飲み 晃男
云いわけが出来ぬ 信号 赤だった 芳仙
言いわけは 一人になつて 聞いて 静水
言いわけが出来ないままに 返済日 庸佑
ばれてると 知らず 言訳くり返し 代仕男
云いわけはどうあれ人が 一人り死に どんたく
言いわけの効かない顔が 待つていた 可住

佳

軸

言いわけじやもう追いつかぬ金づまり
言いわけになつてしまつたことで止め
言いわけはイヤ耳飾りゆれている
想像にまかすと云いわけさえもせず
云いわけを 素直に聞いた頃 恋し
タクシーの中で 云いわけ 考え
言訳をするので 余計 肚が たち
言いわけにならぬ嘘をまだならべ
拝まれてから言いわけ 聞かされる
言いわけに言いわけが いるやこしき
云いわけに 馴れし 貧乏まだ 続き
云いわけをする 気で 街の 灯へ 誘ひ
阿呆らしくなつて云いわけ引込める
云いわけに 妻の 無口が 気にかかり
云いわけを 棚の だるまが 笑つとり
云いわけの 種切れ そうで 切れもせず

痴亭 古方 章雅 初子 紫貞 文庫 千翁

杏花 ひさ美 弘朗 古心 旭峯 恵二朗

季賛 古方 谷水 勝子 独仙 鶴丸 雄声 宗太郎 七面山

場所がらその云いわけは明日にする

天ヶ瀬ダム記念碑の前で、右から松子、玉枝さん、生々庵主幹、令孫滋郎ちゃん、一三夫氏（主幹うつす）



柳 界 展 望

あちらからこちらからお便りを待っています。

（橋高薫風・担当）

十年九月二十四日夜、松江市本郷町鈴木木樹居で開催された。

☆「日車を偲ぶ会」のつどいが十一月七日（日）午後一時から京都市寺町通り仏光寺上ル東側、透玄寺で開催され、近江八幡市在住の令妹と姪御さんを囲んで人間日車を偲んだ。参会者二十五名、本社からは薫風が出席した。

☆第三十二回京浜川柳大会は十一月三日午前十一時から渋谷信用金庫ホールで開催された。亡き塚越迷亭氏がしきりになつかしい。

☆福島県芸術祭参加県下川柳大会は十月三十一日午前十一時から福島市公民館で開催。兼席題、七題ともに二人選という共選であるのも珍しい。

☆大阪文化祭川柳大会は第十七回を数え、十一月二十七日（土）午後五時から大手前会館三階講堂で開催。今年は夜の大会となった。

☆昭和四十年年度札幌市民文化祭川柳大会は十月十八日（月）午後六時から北一条西七丁目婦人会館で開催。

☆佐伯川柳会・和氣川柳会（ともに岡山県）合同句会は十月十七日（日）佐伯町役場で開催。

☆北村香洋祝賀句会（高知市）は十月十日。

☆札幌川柳社第九十二回例会は十月八日、それぞれ開催、寄せ書を頂戴した。

☆白藤学園「葦の会」発足、奈良番傘「柳茶屋」百号突破記念川柳大会は十一月十四日（日）午前十時から奈良市三条町白藤学園で開催。川柳色紙短冊の展覧があった。

☆関学川柳会第一回句会は十一月十三日（土）午後一

時から関西学院大学学生会館四一五号室で開催。各学園川柳の若芽の発展を希望する。

☆児島市文化祭協賛第八回川柳大会は十一月二十一日午前十時から児島市中央公民館で開催。



玉造川柳会創立第二回句会を十月十一日にひかえ、故郷市郎氏の追悼句会も兼ね、盛会だった。

☆富田林市政だより九月三

十日号に市民川柳の会「富柳会」の九月月例会での「秋の交通安全運動」の秀句が掲載された。

免許証とれば法規をもう忘れ

静林庵

信号へ飛び出しそうな子を

白柳

をおさえ

お愛想の車の酒を煙草にし

八郎

大切な命シグナルの青に

花梢

立つ

☆清水白柳氏（大阪市）長男健司氏は山下康恵さんと十月十九日阿部野神社で華燭の典を挙げられた。おめでと。

☆石井黙平氏（豊中市）十一月三日午後二時自宅で老すのため死去された。82歳のご高齢で柳界最古の人といわれる。

☆川柳塔社同人規約が川柳塔社から同人に配布された。

☆中島生々庵氏（大阪市）南区医師会々長は十月十七日近江石山寺から天ヶ瀬ダム方面へ南区医師会の秋季レクリエーションに参加、令孫と共に秋晴れの日を

☆しなの川柳社主幹、石曾根民郎氏（松本市）は昭和四十年十一月三日の文化の日松本市から芸術文化賞を受賞された。お慶び申し上げる。

☆川柳文学（大阪市）十月号は百号を発行。主幹、同人に自祝の言葉一つないのは型破りだが、やはり淋しい。

☆麻生路郎先生追悼・勝谷山川児七回忌句会は昭和四

楽しまれた。不二田一三夫氏も中島小児科診療院の看護婦さんと同道。「みなお医者心配いらぬ車酔い」☆近江砂人氏(池田市)は新居に「玄冬居」と名付け、ようやく老境に入ろうとする人生の一時期を意義深く迎えられる。吉井勇氏命名の「愛染荘」も引き続き併用される由。

☆河相すゝむ氏(西宮市)は十一月二十八日社用で東上、武蔵庵で啞三味、茶六、宗也、清志の諸氏と交歓、三十一日帰阪、薫風居での句会に直行された。☆西出一栄さん(大阪市)は菰市郎氏の初七日にお参りして、川維玉造支部最後の玉造権を靈前に贈り、その霊を慰められた。

☆酒田清子さん(大阪市)は入院中に拘らず医師の許可を得て第一回玉造川柳会の句会に出席された。十月十一日。☆山村祐氏(東京都)句ばかり並んでいると私みたいなきけ者は敬遠してしまいましたが「はたらくた」の同人特集は興味深く拝読。大八氏の筆のカッタツさはマネできませんね。

☆岩本具里院氏(奈良県)川柳塔は気分一転して爽やかな立派な本で、一時は関西柳壇も火の消えた感じでしたが、全く光明を見た感じでした。☆宇和川木耳氏(布施市)から、路郎先生の告別式の際、「川維廢刊」を耳にし、て憂慮していたところ、立派な後継誌が発刊になりお目出度うの祝辞を戴いた。

☆永田六龍子氏(大阪市)は十月二十日付けで伊豆の伊東から旅便り。「消化し切れないスケジュール抱いて旅の宿」☆第19回堺市民川柳大会は十月三十一日(日)開催。本社中島生々庵主幹の柳話

は盛会の柳人諸氏に深い感銘をあたえられた。☆清水一保氏(鳥取県)は東柏町の後援で天皇、皇后両陛下行幸を記念して川柳大会を主催され六十名の盛会であった由。

高須啞三味氏(71歳) 急逝

本誌「川柳初篇研究」の原稿整理を担当されていた柳界の長老高須啞三味氏(東京都)は十一月十一日正午、脳溢血のため急逝された。なお告別式は十三日午後二時から三時まで東京都港区芝四丁目五―四正念寺で。謹悼。(自宅・東京都港区西新橋一丁目二二番二号)

☆松川杜氏の(京都市)は十月五日から、「みちのく」の旅を楽しみ、芭蕉が「閑けさや岩にしみ入る蟬の声」と詠んだ山寺から、飯飯温泉、吾妻スカイラインを抜け、磐梯・熱海で旅塵を洗われた。「蟬塚の緑の中で喰うおでん」

☆越智一水氏(今治市)は十月九、十日の両日伊豆伊東で開かれた第二回全国郵政川柳大会に出席。帰途大阪で下車、亡き路郎先生の霊前で霞乃先生とありし日の路郎先生を語り時の移るを忘れられた。「初島の恋を初島号で聞き」

☆山田季賛氏(高槻市)は十月十八日職場のレクリエーションで神戸裏山の松茸狩を楽しみ、久しぶりに山空の澄んだ空気を胸いっぱい詰めて下山された。

☆福井椋人氏(大阪市)は多蘭子と改号。☆川柳紋土は昭和四十年十月五日、紋土二百号突破記念第十七回西日本川柳大会号を発行。☆第十六回名古屋短詩型文学祭作品集は十月十四日名古屋短詩型文学連盟から発行。

☆たかせ舟(岡山県和気川柳会報)十五号は和気川柳会、佐伯川柳会合同句会号として十月三十一日発行。☆番傘川柳社は大阪市北区伊勢町一番地岡山ビル四階(電話(三六一)二四五五番)へ移転。

☆奥津啓一朗氏(東京都)は東京都三鷹市大沢七十七番地に移転。☆浜田久米雄氏(岡山県)居に十一月から電話開通、番号は岡山県吉永局二四九番。

☆河野春三氏(大阪市)居に電話開通、番号は四六八局一六四五八番。☆石居高志氏(小平市)居に電話開通。東京小平四一局一五三三番。

激しい疲れ 神経痛 肩こり・腰痛 心臓病にも

▲アリナミン®のもう!

第百七十五回 大萬川柳

新年度
第三回

「初対面」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 五百六十二句
入選 五十五句

大阪 十六里
初対面ほくろに髭が生えていた
玉島 旭 峯

初対面指輪が光る手を重ね
玉島 千 翁

挨拶の切れ端ばかり初対面
大阪 保 夫

同姓のよしみでなごむ初対面
松原 万 竿

心得て初対面から煙むにまき
富田 林 東雲楼

初対面大阪弁に助けられ
倉吉 弘 朗

背の低いだけがはずれた初対面
笠岡 達 二

初対面だから標準語も使い
大阪 文 秋

初対面だよと容疑者瞳があわて
布施 清 人

故郷からの便りを持って初対面
大阪 柳 志

両方で値踏みしている初対面
岸和田 きさ子

設計図をすぐに掂げた初対面
大阪 梅 里

初対面貫祿負けをして戻り
大阪 形 水

珍らしい姓ですなあと初対面
大阪 形 水

初対面結局保険のことだった

堺 雨中庵
初対面お里が知れるほど喋り

新居浜 凡 生
親も折れ許した嫁と初対面

出雲 健太郎
初対面のときもあなたは酔っていた

鳥取 秋 星
初対面これが姑になる人か

大阪 秀 夫
大臣は握手が好きな初対面

堺 夢 遊
初対面縁身で笑う人と知り

大阪 弓 彦
披露宴初めまして酌きまわり

加賀 久 雄
初対面ガム噛んでる娘の度胸

豊中 古 方
お電話の声と似つかぬ初対面

大阪 没食子

初対面手持無沙汰で茶をよばれ

大阪 琴 女

12 月の 句 会	玉造川柳会 時 十日(金) 午後六時半 題 「集金」「日附」 「清貧」 所 玉造交叉点南一〇〇米 大阪信用金庫	南海川柳会 時 十六日(木) 題 「組合」「名刺」 「うやむや」 所 難波高架下 親和クラブ	南大阪川柳会 時 二十日(月) 午後六時 題 「早い」「末」「詰る」 「こころ」 所 アベノ区松崎町三ノ一〇 割烹 大 萬
-----------	--	---	--

和泉 吸江

初対面買うと睨んで食いさがり

初対面泣きごとだけで今日は去に

岡山 一声

初対面お通夜の席で名乗りあい

初対面女のカンがよくあたり

見島 恵二朗

初対面東京弁をふとちり

初対面とは思わせず苦労人

大阪 痴亭

マダムもう初対面から手をつねり

初対面信心さす気の長話し

大阪 春果

これも奥をオイオイと呼ぶ初対面

テレビではよく見えますと初対面

泉北 好郎

また妻に袖引かれてる初対面

お手伝いとまだ思ってる初対面

生みの母に初めて会った危篤の夜

五客 見島 恵二朗

こいつめが爺にしようた初対面

初対面同じ年からうまがはい

松原 万竿

初対面毛並みの良さがもう匂い

郡山 孚彦

初対面妻は柄まで覚えて来

大阪 水客

倅せな人だと初対面から思う

人ノ句 大阪 章雅

初対面縁者と知って妻を呼び

地ノ句 大阪 水客

弱味見せまいとする初対面の握手

天ノ句 仙台 弘道

緊張を肩にあつめた初対面

選者吟

卑屈さを惨めに感じ初対面

新年度第三回(11月現在)

大萬川柳ベストテン

一 好郎 八〇 泉北

二 圭井堂 八〇 堺

三 梅里 七五 大阪

米寿記念

川柳句集

「呑洋」

著者北村吞洋氏は元川維高知支部の会員で
高橋蟠蛇氏はその実弟である。

八十八歳という高齢には思えない著者の若
々しい思想とエネルギーを序文で大森風来子
氏がたたえている。

発行所 岡山市内田三〇三

川柳岡山社

(非売品)

大いなる悟り

柳話的釈尊伝

山路閑古著

川柳の弘通と釈迦の慈悲を伝える

定価450円

発行所 東京都杉並区和田本町二八

佼成出版社

40	凡茶	3、5	奈良	以下略
39	恵二朗	三、五	兒島	
38	形水	四、〇	大坂	
37	久雄	四、〇	加賀	
36	可住	四、〇	篠山	
35	弘道	四、〇	仙台	
34	遠二	四、〇	笠岡	
33	静馬	四、〇	高槻	
32	没食子	四、五	大坂	
31	小松園	五、〇	大坂	
30	水客	五、五	大坂	
29	万竿	五、五	松原	
28	柳志	六、〇	大坂	
27	宗太郎	六、五	石川	
26	美房	六、五	富田	
25	桃里	六、五	笠岡	
24	吸江	七、〇	和泉	

次ぎの兼題「筋書き」 五句以内

締切 十一月末日

発表 十二月二十日

昭和四十一年

一月の兼題「抜け道」五句以内

締切 十二月末日

発表 一月二十日

投句先

大阪市阿倍野区松崎町三ノ十

大萬川柳会

老地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

岡鉄川柳会

(岡山県) 浜田久米雄報

悪い子にさせる隣の柿の色
ひやかしもませて祝電友へ打ち
祝電を地声の大きいのに読ませ
祝電を一人になつて読みかえし
台風の恐さ瓦の数で言い
棟瓦飛んで下のを連れて割り
原爆の恐怖瓦が焦げており
丸顔が職場の空気明るくし
耐一杯財布はたいて今日を終え
長雨で猫も見ていない無精ひげ
無精ひげ黙々不作の田を回り
無精ひげ稔りの秋へ笑いかけ
わら屋根の涼しさ瓦屋根知らず

身の保全だけとは吏員情けなし
左側通れば孫に注意され
この下の生活もあるぞトタン屋根
朝顔に天性があり左巻き

餞ん坊
あきら
秋月
照路
天竜
忙友
佐加恵
照路
哲郎
三茶
胡風
譲士
久米雄

代仕男
独仙
岬月
京斗

出雲句会

(出雲市) 尼緑之助報

草野球屋根に飛ばしたホームラン
予告篇ただそれだけで泣いている
予告なく大正十二年九月一日
汽車電車バスに予告のスター陣
予告なく家計にひびく客が来る
謹啓のピラは値上げの予告なり
左合せ姑へ別れの髪を梳く
左前着せて姑に叱られる
予告する客にはお茶ですまされず
左利き君もそうかと親しまれ
質草の流れる予告妻にバレ
予告から噂が実となる騒ぎ
予告篇クライマックスだけを見せ
左手に持つ剃刀で不安がり
予告して訪ねても居留守の偉い人
屋根裏の住居で派手な飲みつぶり
屋根の波一と際高いビルが見え
行幸を屋根の上からお迎え
抱いた子が安全帽をたたく朝
声は声として値上り予告する
老舗もう屋号重荷の左り前
吉日が近く近所の目を集め

サービスの品だけ売れる忙がしさ
食いつめる迄は都会もよい処
強いこと言うてもおんな乳が張り
都会に住んで都会の地図を知らぬまま
神経を抜きにかかつた針の音
観光バス都会の表だけ走り
あてにしていたほど来ないインタビユー

南大阪川柳会

(大阪市) 金井文秋報

耳立てる神経残し犬は寝る
神経を歯科医叩いて確かめる
インタビユー学者の型をくずさない
かけもちの教師は自習ばかりさせ
好きですと強気が邪魔で言いきれず
都会人みんな忙しそうに行く
神経をすり減らしすり減らし中年の浮気
振られたとにぶい神経でもわかり
漫才師舞台衣裳のまま飛ばし
無神経ではなし本妻別れる気
都会の子猫の砂まで買ってくる
実印へ全神経を尖らせる
インタビユー口と腹とは大違い
北浜に強気弱気の市が立ち
儲けることもすつかり忘れていた多忙
インタビユー痛いところもついでくる
インタビユー海女は濡れ身を火にあぶり
インタビユー後で実はと宣伝費
神経を使う旦那に肩がこり
神経が立つてるらしい電話口
神経の細い社長でよう肥えず
ハンドバッグ置いて他人を寄せつけず
日がきまると多忙な母へ感謝する
足元を見たか強気の値が折れず
同郷のなまりでくすインタビユー
犯人の母へマイク非情なり
インタビユー勝つた方たけ聞きに行く
インタビユー良妻賢母の顔で逢い

静馬
一舟
小松園
一栄
梅里
清人
圭井堂

紅葉
李朋
祥月
須恵吉
健太郎
正朗
芳一
寛一
愛吉
澄水
栄一郎
せじ
青軒
春軒
専正
河南
草丘
章峯
晃男
緑之助

玉造川柳会

(大阪市) 西出一栄報

結局は社長の声でけりがつき

滋雀
柳太
清志
柳志
あいき
文秋
静波
恒明
金郎
好郎
白柳
凡子
よしを
弓彦
古方
痴亭
章翁
双楽
有子
八郎
吸江
幸子
柳宏子
章雅
一三夫
喜仙
野菜

どなり声アパート中が首を出し
お別れに本当の音が欲しかった
山彦へ返事が欲しい人を呼び
カムバックまるで奇蹟のように實め
監督の情に打撃よみがえり
カムバック犬のように来ぬ拍子
そら駆けよ犬よ信号は今青だ
前進の姿勢で銅像雨に濡れ
松茸飯嫁に教える水加減
松茸狩山ですき焼食べただけ
お豆腐のかげから松茸浮くおつゆ
松茸は漢法薬の値に迫り
茸狩りも気の強いが多くとり
モヤシ買う客へ松茸すめかね
松茸の値を見直せば十グラム
赤のれん松茸だけが売れ残り
ふさん掛け松茸めしの声となり
血眼で松茸探すきやしやな指
齢六十未だ半農の域を出ず
半分を嘘と知りつつ聞く無心
ひやかし半分言ひ値で呉れた拍手ぬけ
思ふこと半分も言えず顔を伏せ
半分は匙を投げてる賛成派
半分のおやつ末子だぞこね
豆板の半分都合よく割れず
姑は嫁に半分聞かす愚痴
半分は欲にからんで貸した金
開店を飾る花輪は組名前
画家の名も値段も知らぬ絵を飾り
身近から飾る余裕が出来はじめ
開店の派手な花輪が雨に濡れ

恒明 三更 一麦 千葉 柳志 六竜子 柳太 野菜 一栄 金三 風仙洞 よし子 順三 文秋 功やなぎ 眉水 八郎 喜久堂 章雅 白柳 有子 貞山 句念坊 痴亭 清子 三時 珠笑 古方 井平

着飾つて見せたい彼氏は無頓着
末つ子の荷飾りへ最後の見栄を張り
ありつたけ飾り鏡へ確める
借金にゆくの帯だの着物だの
飾らない父の言葉にある意味
荷飾りを褒めて帰つてくさして

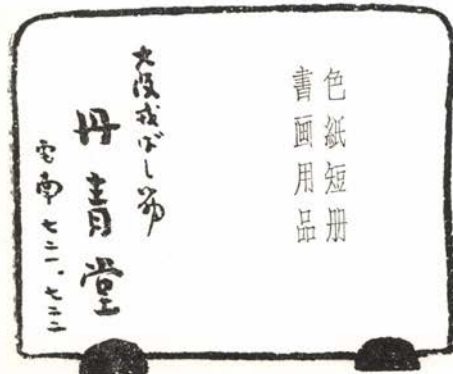
ウィロー社句会 (ハワイ) 築山快夢起報

旅の子の便り待つ母指を折り
指一つさされず子らを育てあげ
堀み合う指へ若さが通うなり
うしろ指さされて居てもまだ自慢
関取の御礼五本の指を捺し
指先のポイに観光客あわて
よしよしと何でも孫と指切りし
あの時は指輪をはめる手がふるえ
指導する力届かぬ思いやり
婚約指輪未来明るく手に光り
前歴は指の太さが物語り
指先ではじき算盤立てて見せ
もう冷めて指でつまんだ恋だつた
指先へ馴れて生活のキイの音
五十年ふしくれた指が知る
マニキュアの指にダイヤが灯をほく
ホーハナの苦勞を語る太い指
利用する時だけ先輩先輩と
もめ事に又先輩の知恵を借り
先輩と飲めばこちは酌ぐばかり
先輩へチト気づまらぬ秘書つれ
胸せまる思い先輩今日も近き
先輩の心やさしき思ひやり

正彦 あいき 滋雀 静馬 同郎 好郎 柳太 野菜 一栄 金三 風仙洞 よし子 順三 文秋 功やなぎ 眉水 八郎 喜久堂 章雅 白柳 有子 貞山 句念坊 痴亭 清子 三時 珠笑 古方 井平

先輩の停年敬語で送り出し
先輩の玄関ブルまで斜に構え
先輩が今朝もラジオで一人逝き
先輩と云われ汗かく平社員
先輩が隣りに居つて酔えもせず
先輩に順をゆずつた散髪屋
お流れをと云えば先輩うれしがり
仲裁に來た先輩の梯子酒
ノイローゼ偉い先輩多すぎて
先輩へ大の字つけて祭り上げ
先輩と煽て奢らす下心
加賀川柳クラブ句会 野村味平報
悶着が解けて家裁を出る笑顔

柳葉 快夢起 紅茶 カロ女 泉水 雪女 三石 蒼蛇楼 曉舟 エス子 光郎



前歴も口程にない小悪党
前歴がフット口に出る酒の勢
前歴があつたばかりに首になり
前歴は互に触れずどや住い
前歴が転動たびにひつかかり
前歴をかくせぬ肌の昇り竜
前歴が何んやと店主の人情味
あらそえぬ前歴垢抜けした女

交通局句会 (大阪市) 児島

(大阪市) 児島与呂志報

醉雅三一清市翠みの
 升巢三四歩郎芳る
 古志報
 味久雅政光味雅政光久味魯醉政雅光味醉魯政雅
 平雄城代郎平城代郎雄平木羊代城郎平羊木代城

富柳会 (富田林市) 阿
想う人見舞に來ぬと氣に病みて
見舞狀出した途端に計報くる
お見舞が見舞の花をけつて去に
長欠を見舞えは奥で牌の音
神様を信じなさいと見舞客
荒れた肌それはあなたの罪といひ
一肌をぬいでやろうか見ておれず
肌寒くそつとふとんを子にも着せ
サンブル作らず現物で勝負する
サンブルのような夫で不足あり
袍の中のサンブルの角がすれ

(富田林市) 阿部柳太報

漫多郎 幸 鉄 六 孤 十 充 淡 香 山 春 一 正 柳
与呂晴 兒 の 竜 七 松 舟 歩 喜 井 果 乃 治 太
幸 暗 ぼる 子 舟 亭 舟 歩 を 喜 井 果 乃 治 太

のむほどに河内ことばでくどかち
逆上へつゝ河内弁でつしまい
靖國で息子へしやべる河内弁
免許証をとれば法規をもう忘れ
砂利トラも可愛い園児の手に止り

南海川柳会 (大阪市) 辻圭水報

汗だけをかいて仕事はからまわり
帰宅したセールスマンは無口なり
セールスと解つて女中言葉変え
原色のきらめく海へ着ういる

竹原川柳会 (竹原市) 山内静水報

あきびんのくふうでできたおひな様

美屋 美代 柳太 静林庵 吸江 主水 専翁 和郎 宏子 久子

(竹原市) 山内静水報

久報宏和專圭報吸靜柳美美
子子子翁水江庵太代房

— 62 —

姉ちやんにチャンバラ勝てぬ男の子
まだ青いみかんの嫁入先決まり
兄ちゃんはいびき今夜は腹がたち
体育祭ホークダンスへ師もまじり
美しい花に空瓶そまつすぎ
指切りをしてる彼女の瞳がきれい
美しく終り失恋もう忘れ
朝顔の種を拾って秋思う
コオロギが鳴いて田舎の繁華街
一番風呂もつたない湯があふれ
以上・小・中・高
ミルク瓶空っぽにして児は眠り
かみしめるように味う宿の酒
明日は来るだろう手紙に今日も寝る
夕映に今日一日を満ち足る
野心もつ人の無口が気味悪し
ハンサムに声かけられた日の温み
空しさを小犬とじやれて友は病み
地球儀のニキビつぶした傷に見え
もらい風呂音のせんよう水をうめ
ポーナスで返すと息子他人めき
堅い本読む気になるも秋の夜
新幹線豆台風に脅され
懸命に勤めて今日も日がかげり
婿さんが作ってくれた目玉焼
減食はやつぱり無理な秋の空
三面鏡今宵は土曜と言うゆとり
一笑に付して心にある余裕
赤トンボ案山子へ苦勞さん飛び
這い初めた児がいて秋の夜が温し
松茸の匂い八百屋でかいだきり

洋子 浄美 日出美 美利恵 潤次 清子 延幸 和子 俊司 凡女 雅子 操路 政一 譲恵 澄尾 和武 房枝 春水 扇水 正風 松み 青居 秋月 紀世美 緑水

杜風にも何時しかなれた顔の色
新しい下駄石段登る音になり
末ツ子の意地をとうした赤い服
彼岸花目にしむ鎌の手を休め
呼び捨てにされて頼れる友の居て

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

元旦の琴は先祖に聴かすよう
どん底に生きて先祖に傷つけず
御先祖に学者も一人加えとき
表札も小さく老いたる詩人住む
表札は十代歌手の門構え
商店街は表札の在りどころ
一万歩陸橋に来て息を入れ
陸橋完成又百貨店儲ける気
違まわり陸橋渡たるお上りさん
表札も斜め前栽も荒れたたま
表札にくもの果かかつて療養中
我が家系ご先祖までは明し得ず
癒え近く墳墓の土を夢にみる
貧を知る子等で先祖の墓を建て
先祖代々の何となくありがたく
今日の家族となつたリンを打ち
先祖の田潰してアパートで儲け
心機一転石碑の紋をじつと見る
ご先祖の財のリレーに苦勞する
別居中表札までがわびしそ
表札をあげて二人の愛の果よ
表札を変えられそうと恐妻家
めし粒で貼った名刺の二階借

まるべに川柳会 (大阪市) 川村好郎報

春江 鬼焼 俊勝 房水 静子 弥生 蕪風 好太郎 圭江 吸子 章子 幸子 雄人 一直 功雄 白坊 くり 凡子 痴亭 岳太 芙容 芙容 照代 梅里

銀婚へ記念の指輪まだ光り
記念樹は母校の屋根を越す茂り
記念日を女房の方が忘れてず
記念樹は昔の風と語つてい
結婚記念日古い手紙を読まされる
新築記念犬もカラーで撮つてやり
古くとも記念の時計手離さず
記念樹も都市計画で移植され
菊一輪匂うて妻の座もかたし
来年は五十秋風身にしみて
虫の声昨晩よりも多くなり
筆不精暑中見舞も出しそびれ
台風見舞ついでに平素も詫びて
読書より食慾の秋と子は答え
秋晴れに白菊買うて立話
一坪の庭に月見のどんぐり供え
ひらかたの阪田三吉いい香り

泉太 睦幸 兒月 兒里 睦兒 兒香 水彦 斗里 好郎 邦彦 行彦 邦彦 立彦 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太 泉太

宴会・折詰・出張パーティ

大 萬

阿倍野区松崎町
TEL 3935・7782
南区豊屋町三ツ寺センター
TEL 20 9 1 8 4

・一ペニ二篇・

昨年の賀状には「不具五年まだ不自由に馴れきらず（啞三昧）」

本年のには「年齢のこと

▽初校が出るギリギリまで白柳氏の後記をお待ちしていたがご多忙らしかったのが今月の後記はばく一人で書くことにした。どなたも忙しいのでお気の毒である

▽前号も誤植だらけだったこれはばく一人の責任で、まったく申しわけない。誤植のため雑誌の品位がどれだけ傷つくか、たまらない気持ちである。謹んでおわび申しあげる。

▽阿部佐保蘭氏が「英訳川柳の火は消えず」を送ってくださいました。「川雑」時代からのおなじみのものである。▽「川傍柳初篇研究」輪講の整理をされていた高須啞三昧氏が十一月十一日正午脳溢血で急逝された。タイトルの字が氏の遺筆となつた。謹悼。

▽もう一つ「雅号ぶっちゃけばなし」も、34年ごろに「雅号由来記」として企画したもののだが、故路郎前主幹が「現代柳人録」を企画されたので中止したものである。どうやらこれも好評なので同人総登場というプランで進めていこうとおもっている。

▽今月の同人特集はポーナスをテーマにして、出す側と貰う側からご執筆ねがった。

▽さて、次号の「川柳ユーモア特集」だが、果してどれくらい句が集まるか、その数によっては大冒険をやってみよう。

▽阿達義雄氏の「川柳点における軽妙洒落」や清博美氏の「川傍柳の紹介」奥津啓一郎氏の「明治川柳と風俗」などが次号以後に待機しているが、古句研究ばかりならべることもできないので除々に発表させていただくつもりである。

▽忘年句会も新年句会も余興はしないことになった。したがって懇親宴も見送ってはどうか、と句会部長の菊田いさか氏から申し入れがあった。

▽ことしほど各界の大物が物故されたことはめずらしいのではないか。梨園の市川団十郎も胃ガンでなくなつた。

▽五年前のぼくの誕生日から、新聞に出た名士や知人の死を切り抜いてスクラップ、ブックにはりだした。

故人をしのぶよすがとするためだったが、ことしはとくに多かった。

▽相変らず時間に追われ、放送のほうが開店休業なのはつらい。

▽さて、次号は新年号だがどなたもいいお年を迎えてください。(不二田一三夫)

本社十二月忘年句会

日時 十二月六日(月) 午後六時
会場 自安寺(妙見さん)
市電千日前下車スグ北側
(電話211・1478番)

柳話 若本多久志
兼題「落し物」 西田柳宏子選

「くつ下」 本多柳志選

「一円貨」 内藤さき子選

「大きい」 松江梅里選

席題 三題(題と選者は当日発表)

会費 百五十円
★投句だけの方は五十円封入

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社
電話大阪271・3985番

麻生路郎 著
新川柳鑑賞

珠玉五百数句の圧巻

定価 250円 送料 80円

B6版 250ページ

浜田久米雄著
麻生路郎序
川柳句集



定価 三百円
送料 五十円

川柳句集

檸檬 (れもん)

橘高薫風 著

A5版 定価 500円 (送料共)

新年号発表

川柳塔 (10句)

近作柳樽 (10句)

課題吟 (10句)

「馬」
「和服」
「珍客」

木山 遠二選
山阿 茶選
尼 緑之助選

北川 春巢選
若本 多久志選
中島 生々庵選
松江 梅里選
西 栗選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (10句)

近作柳樽 (10句)

課題吟 (各題10句)

「寝息」
「代書」
「一万歩」

西出 一栄選
弘津 柳慶選
本田 恵二朗選

若本 多久志選
中島 生々庵選
北川 春巢選
川村 好郎選
菊 沢小松園選

★川柳塔の投句は本社同人に限りまします。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百二十円 (送料六円)

半年分 七百五十円 (送料共)
一年分 千四百四十円 (送料共)

昭和四十年十一月二十五日印刷
昭和四十年十二月一日発行

発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一一三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番

GOLDEN
O.S.K

の紳士服

スマートで
着心地のよい



株式会社
オーエスケー





世界の名酒を
贈る歓び：

33種の

豪華なギフトセットを
そろえております

世界の通があこがれる

サントリーの洋酒



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広 東 料 理

豚 饅 蓬 菜 焼 売

大 阪 な ん ば

◆ 出 張 販 売 店 ◆

なんば高島屋店・心齋橋そごう店・梅田阪神百貨店
天満京阪ストアー・弁天阜頭港店・中之島サン・ストアー